

尾呂 符
第 409
巻 20

新宿
河口
街道

川より
こゝに
魚有と
心りば
所を流
去中川
中川に
鯉魚を
産むと
美味
あり



新宿
河口
街道



夕顔観音堂 新宿の渡口より半道より西北の方中川の堤

傍に飯塚村とありあり本寺聖観世音ハ金像あり

丈五寸許ありと云されども深く内合龍に秘して拜せり

をゆきとす別は慈覚大師の刻の観音の木像を以て合龍前

安を相傳ふ此地ハ昔莊官関口氏某の采地あり

墳墓の旧址なりと 往古関口氏此地に就く熊野権現及ひ水神

等の社を創む 其社前ハ老松と榎樹の二樹の雙立する

あり春夏ハ枝葉焦悴秋冬ハ翠色を増む人以此奇ありと

又此樹間時とく光を發し或ハ龍燈の梢にかゝるを云ふ

寛文八年戊申関口氏此地の醫生深谷氏と共に相謀りて此

樹下を堀り一ノ二の佛具を得り 深谷氏ハ紀州の産なり

祠の傍に住を箱温素より信心やま目蓮の是必古時此地に有名の寺院

弘法より一ノ妙経唱題解急ありと云ふ 是必古時此地に有名の寺院

あり一ノ妙経と云く竟は同年六月六日謹く猶此土中を堀りに

金像の大非の像一軀を獲り 佛像背面ハ弘長二年二月仍直小

深谷氏の家に移し假し佛壇に安を相好端嚴実ハ凡工の

所造よりあり然し其前宵深谷氏老翁媪共夢の 應ありと云く奇ありと

營此靈像を遷し

猿俣 新宿より北の方の邑名なり

神鳳 抄曰 下總國 葛西

猿俣 御厨 百八十丁 新御厨 在之 云云

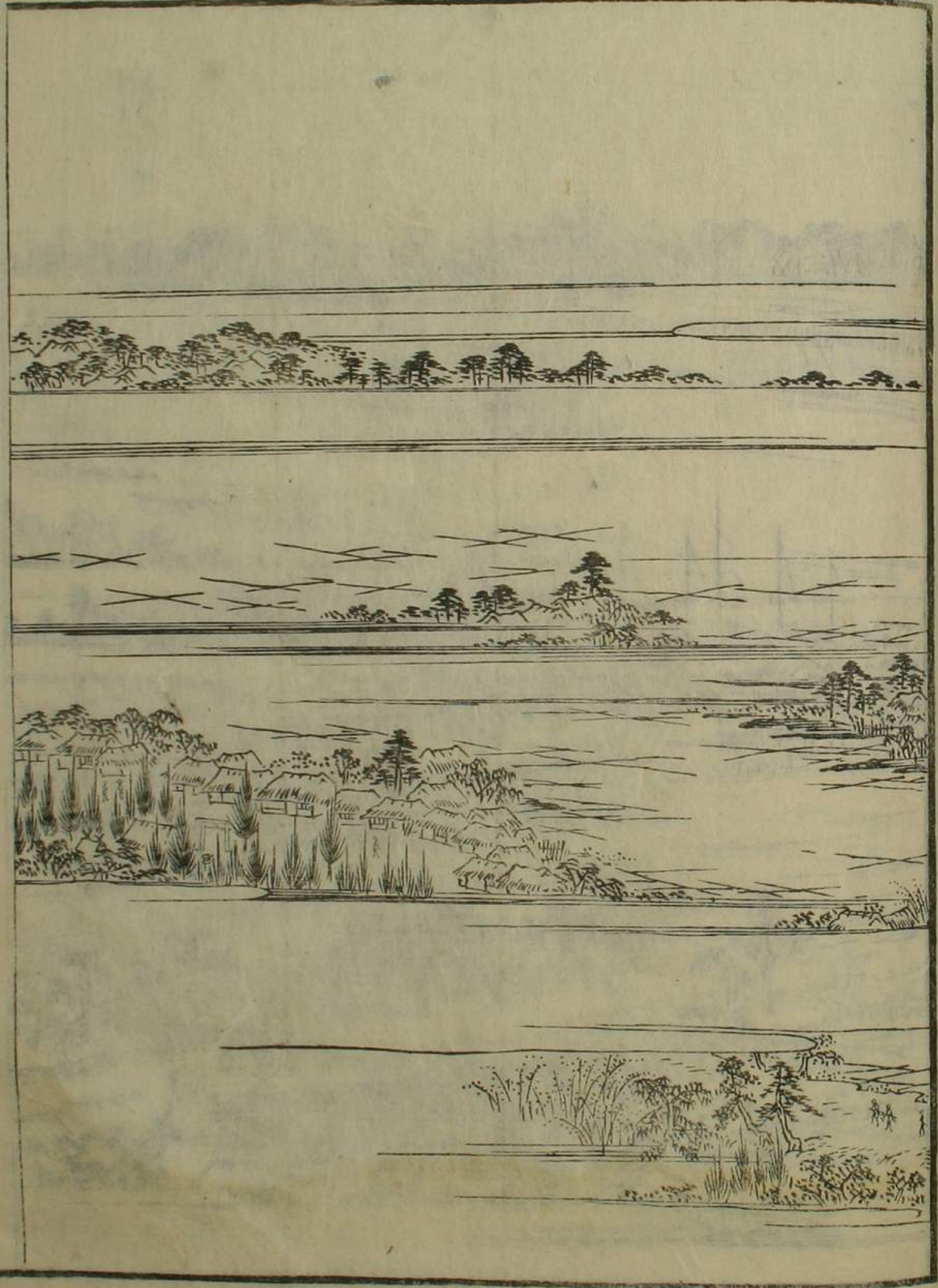
北条家永禄二年領後藤一窪寺大藏丞といふ人葛西猿俣四十九貫文の地を

領しあり葛西今武蔵國に屬すといふも古ハ下總國なり古書に云ふかかくのめり

和銅寺廢址同所あり佛生山と号し真言の古藍あり

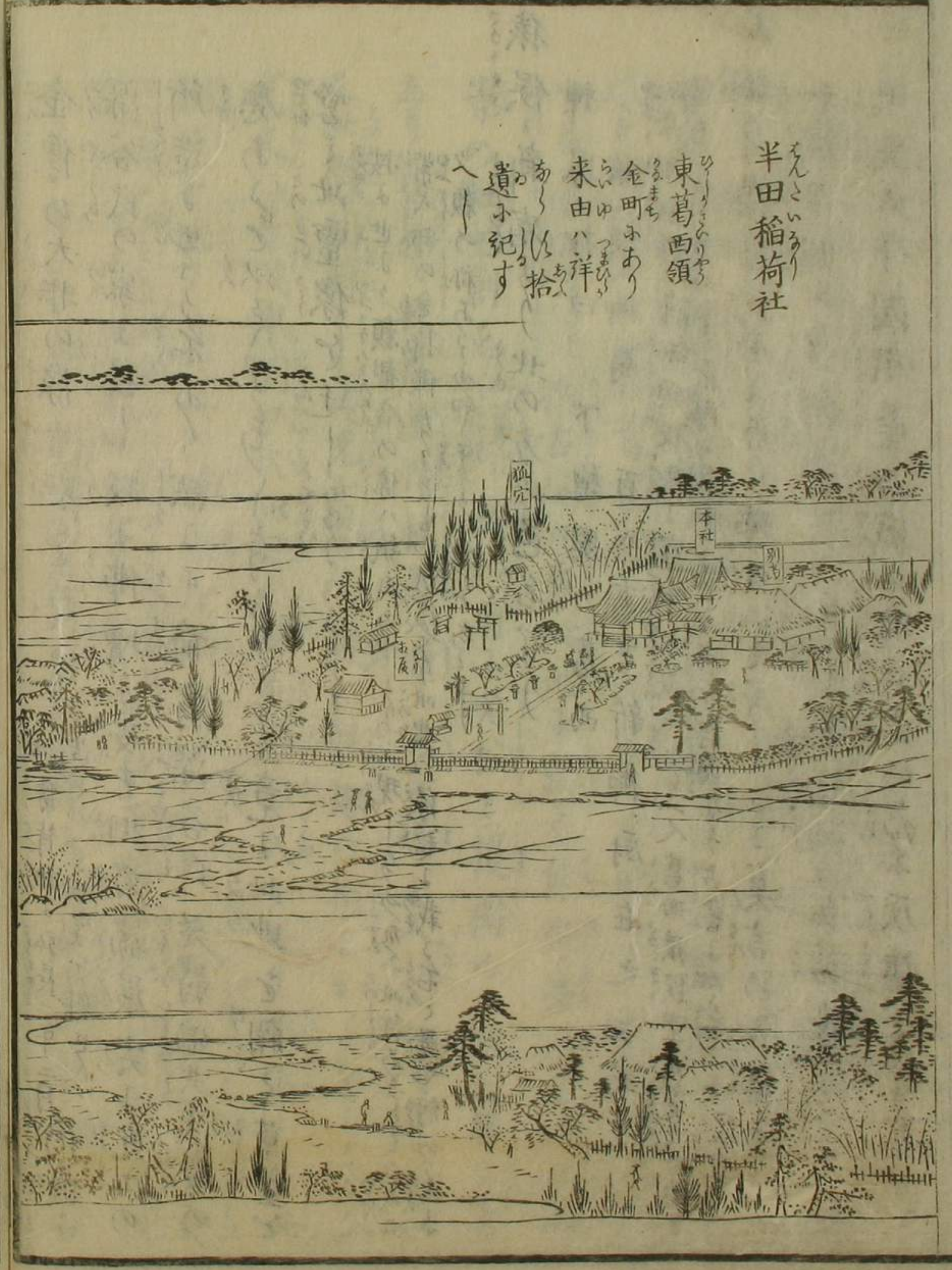
和銅年間の草創ありと云傳中古迄ハ伽藍魏より

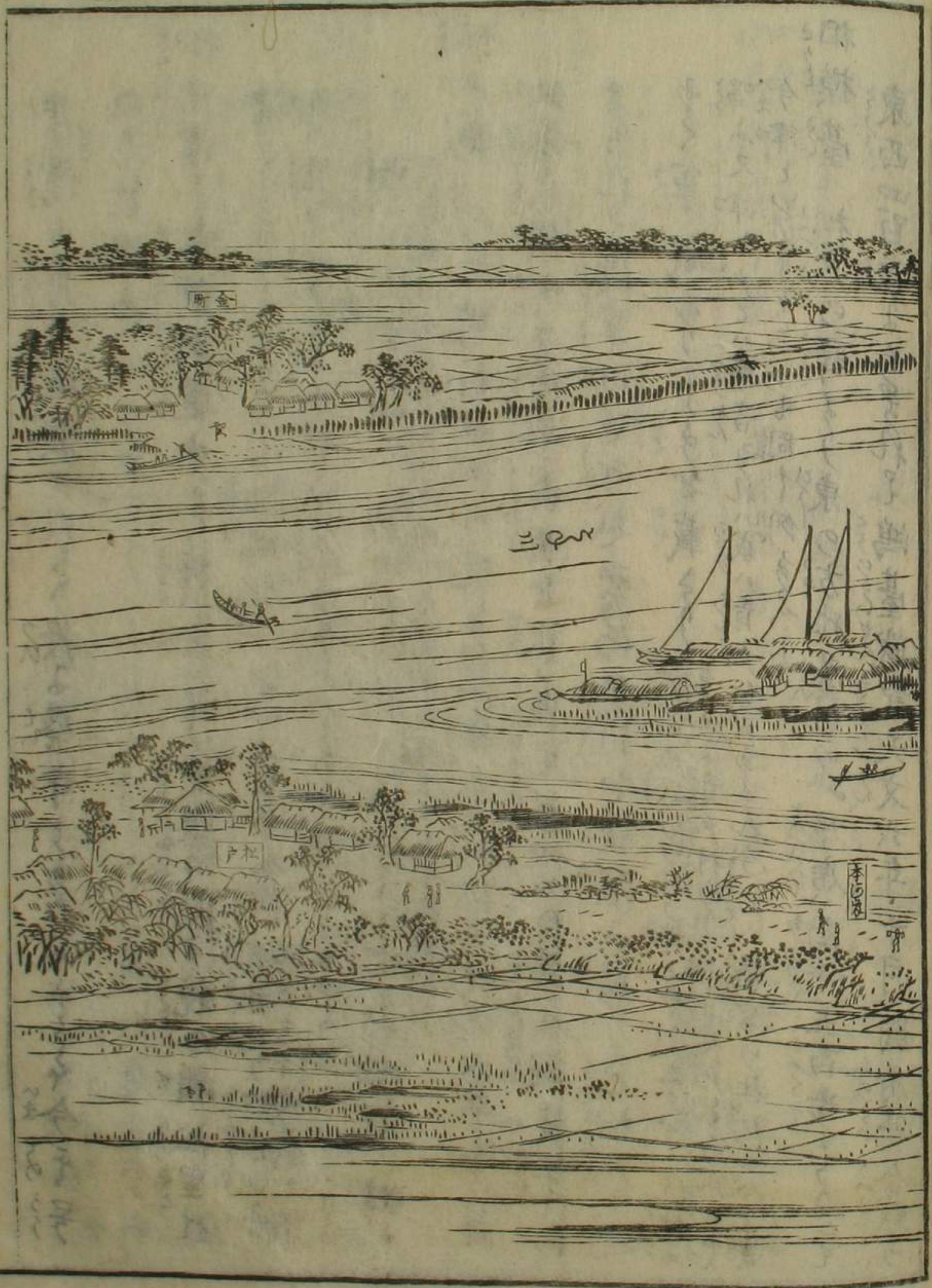
天文六年國府臺合戦の時兵火の爲ハ灰燼となり



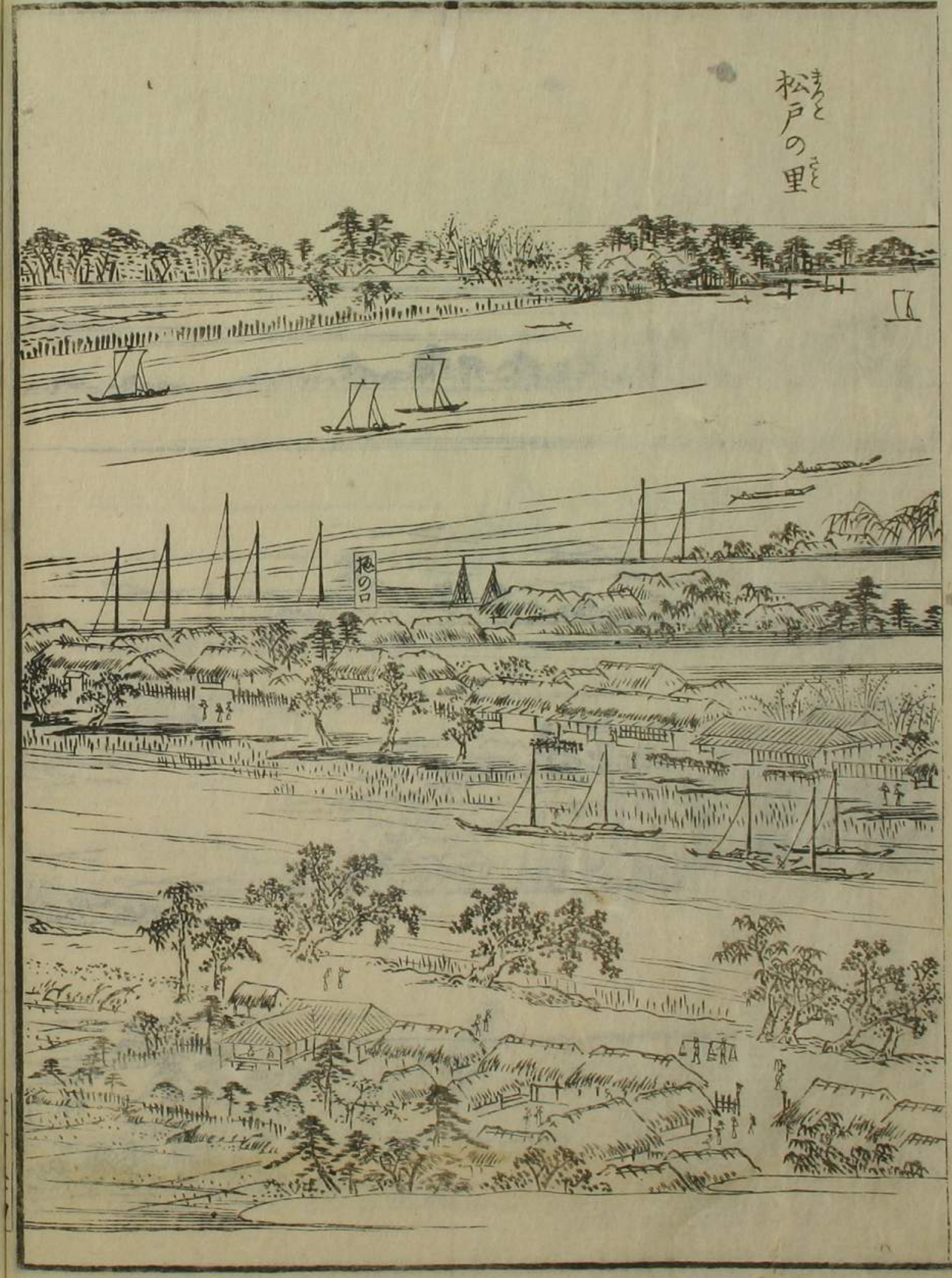
半田稻荷社

東葛西領
金町あり
来由ハ洋
道不紀す
へ





まつと
戸の
里



寺僧も悉く退散され、終に廢寺となり、今其号

の〜と傳ふ

松戸津 常陸街道中、驛舎あり、更級日記、鏡の瀬、松里此

津、よとあり、く〜とあり、此地のゆゑとあり、人飲、美紀紀、治承四年九月十日、武藏と下

徳の境あり、松戸の庄市河とあり、ゆゑとあり、む〜とあり、松戸の庄の谷、ゆ〜

松戸堤、同所、新利根川の堤をり、鴻臺戦記、天文六年十月

北條氏綱、小弓所、義明を攻、頃、月四日の夜、氏綱、夜半に

まきれ、浅草川を打越、ゆゑの宿を夜深、通り、松戸の堤

ゆく、軍議あり、し〜を載り、ゆゑの宿ゆゑの地、ゆゑ今ある、ゆゑ

相模臺、松戸の驛より、東の方、此臺をり、廣南北五百歩、ゆゑ

東西四百歩、よあり、鴻臺戦記、天文六年十月、國府臺合戦の

糸下、松戸の川を打越、ゆゑ陣の内より、推津村、上堀、江鹿島と

始、〜五十騎、ゆゑ相模臺、打揚、敵の人数と見合、ゆゑあり

小弓所、曹子墓、鴻臺戦記、義明滅亡の糸下、乳母、レンセイと

々、女房所、曹子の亡屍を、人目を忍ひ、此相模臺、よ来

其墓所、詣り、由記、ゆゑ今其墓の旧跡、ゆゑあり

行徳船場、行徳四丁目の河岸なり、土人新河岸と唱、旅舎あり

て賑、江戸小細町三丁目の河岸より、此地、追船路、三里八町

あり、此所、ゆゑ、房、常陸等の國への街道なり

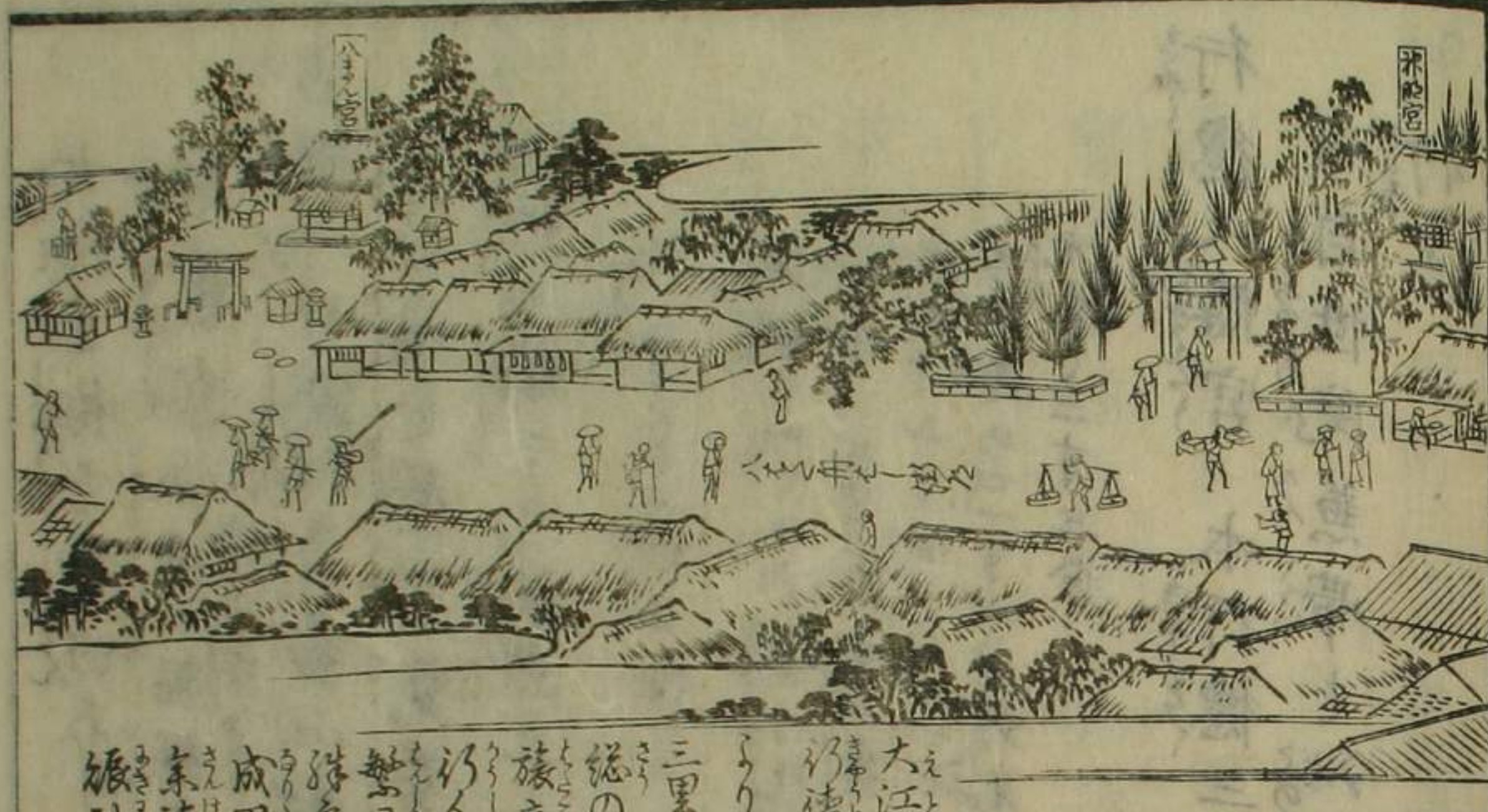
辨財天祠、同所、四五町下の方、湊村あり、昔、ハ潮除堤の松林の

下、あり、ゆゑ、号、石の小祠あり、今、ハ田明院、移、徳年、間

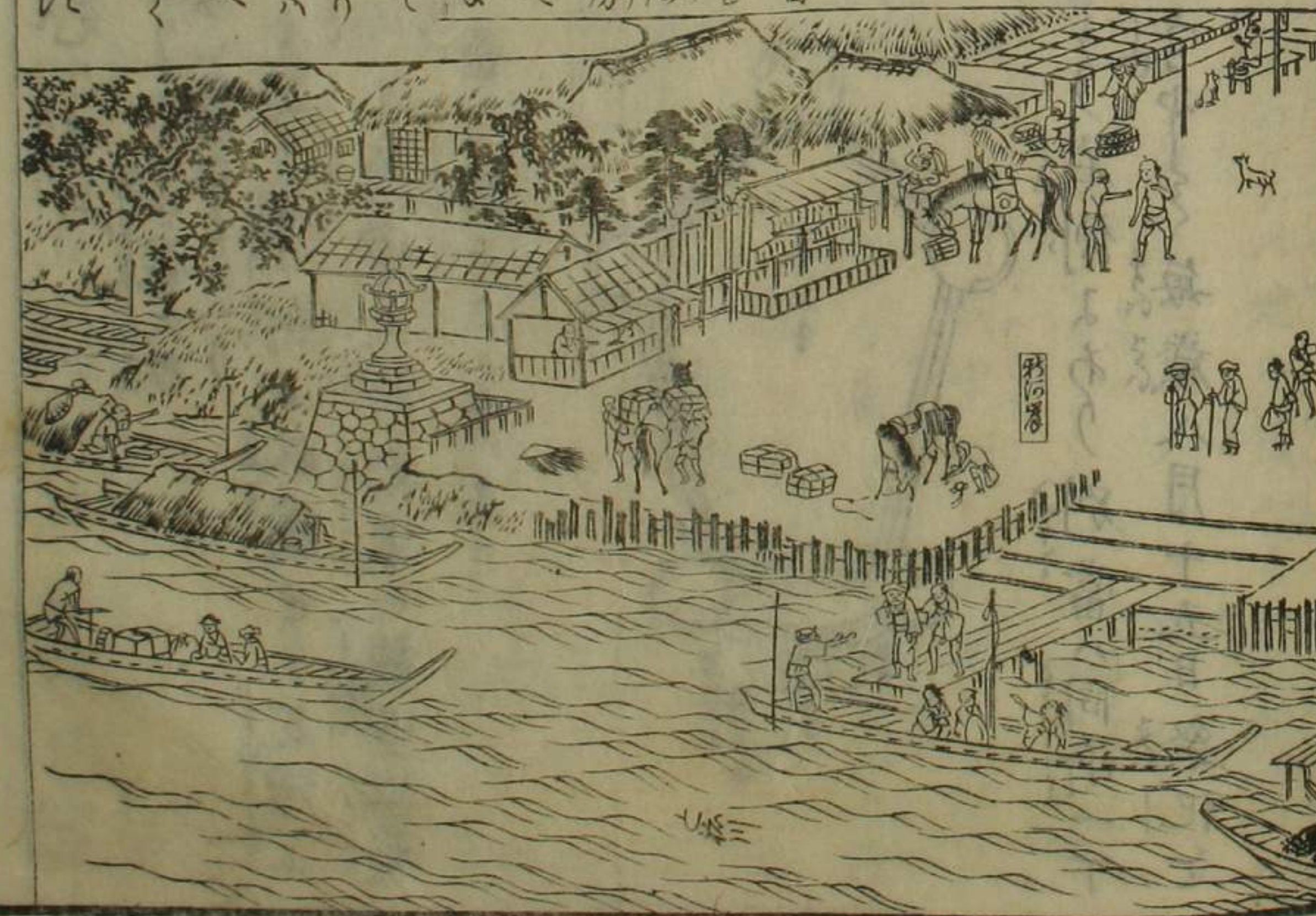
江戸青山梅窓院の順、譽唯然和尚、此神の靈、尔より、享保

三年、戊戌、宮居を建立あり、ゆゑ、祭、神を、藝州、嚴島の、神

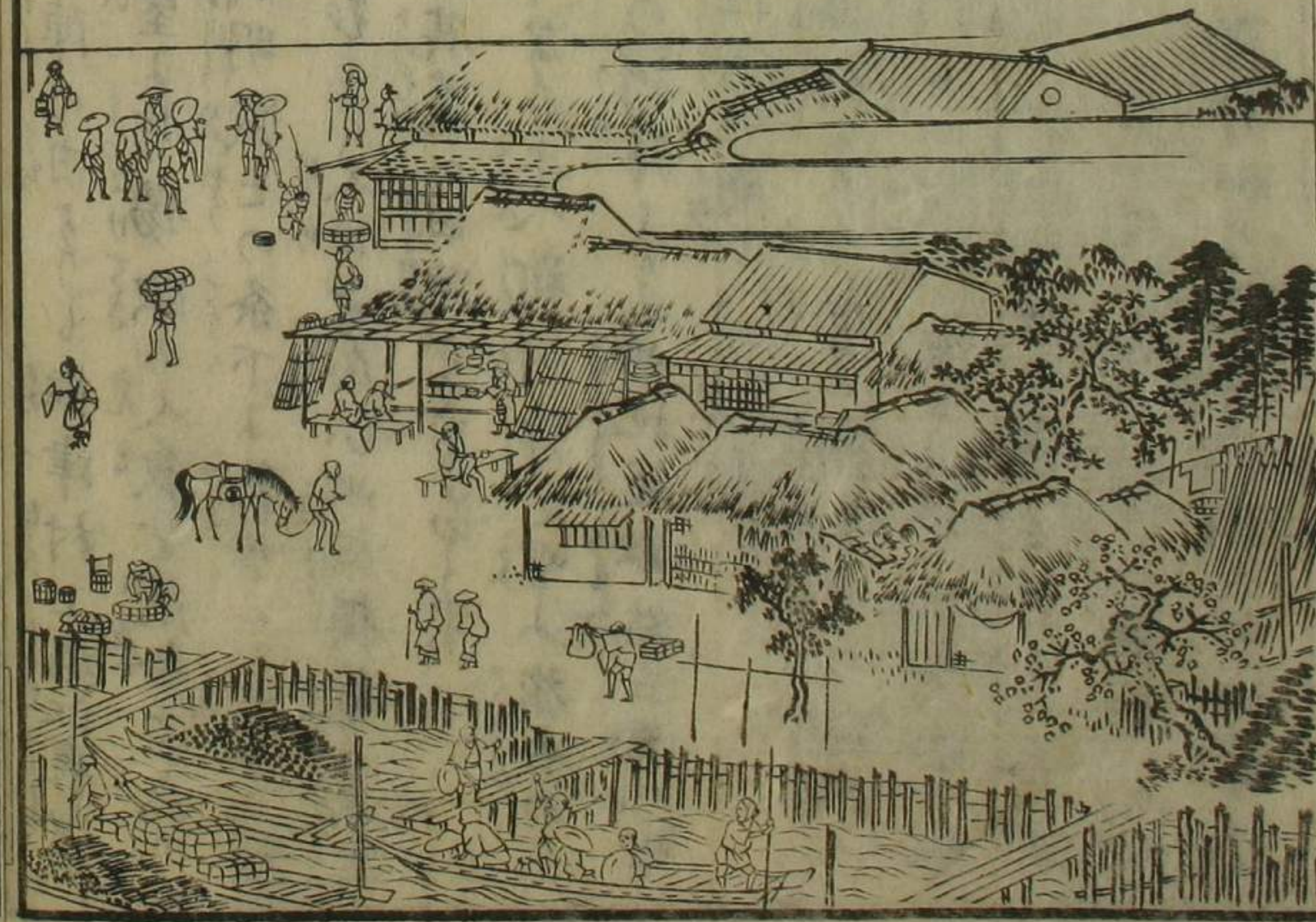
小同、市杵島姫神、ゆゑ、海神村の阿諏訪神、ハ男神、尚社、



えと 大江戸の細町目
 び 徳の港とて
 りり 地まで
 三里八丁あり房
 徳の路路中
 旅亭ありあま
 乃人絡繹とて
 禁昌の地あり
 徳文正の九月ハ
 成田不動尊へ
 東浦の人影
 旅ひ大方
 な



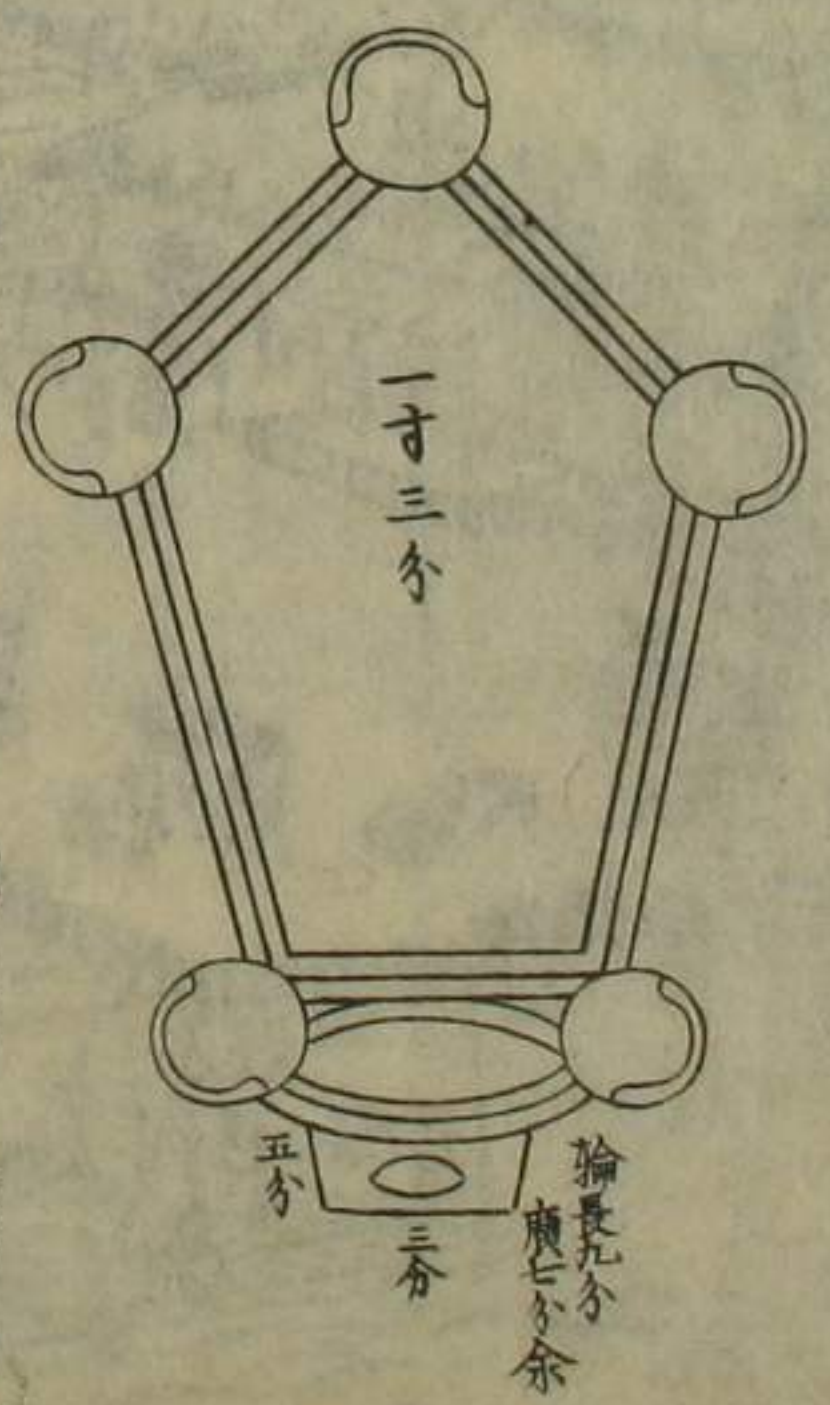
徳行の船場



女神と称を神田あり弁天免と唱ふ
 船靈宮 画像一幅探信の事ありとの古此地大船
 古鈴一口湊村青陽山善照寺とつる浄刹は收藏せり芝増上
 寺は属を開山ハ覚誓上人と号を慈覚大師彫造の観音湛慶
 の作の焰王又法然上人鑑御影と称せりとのあり

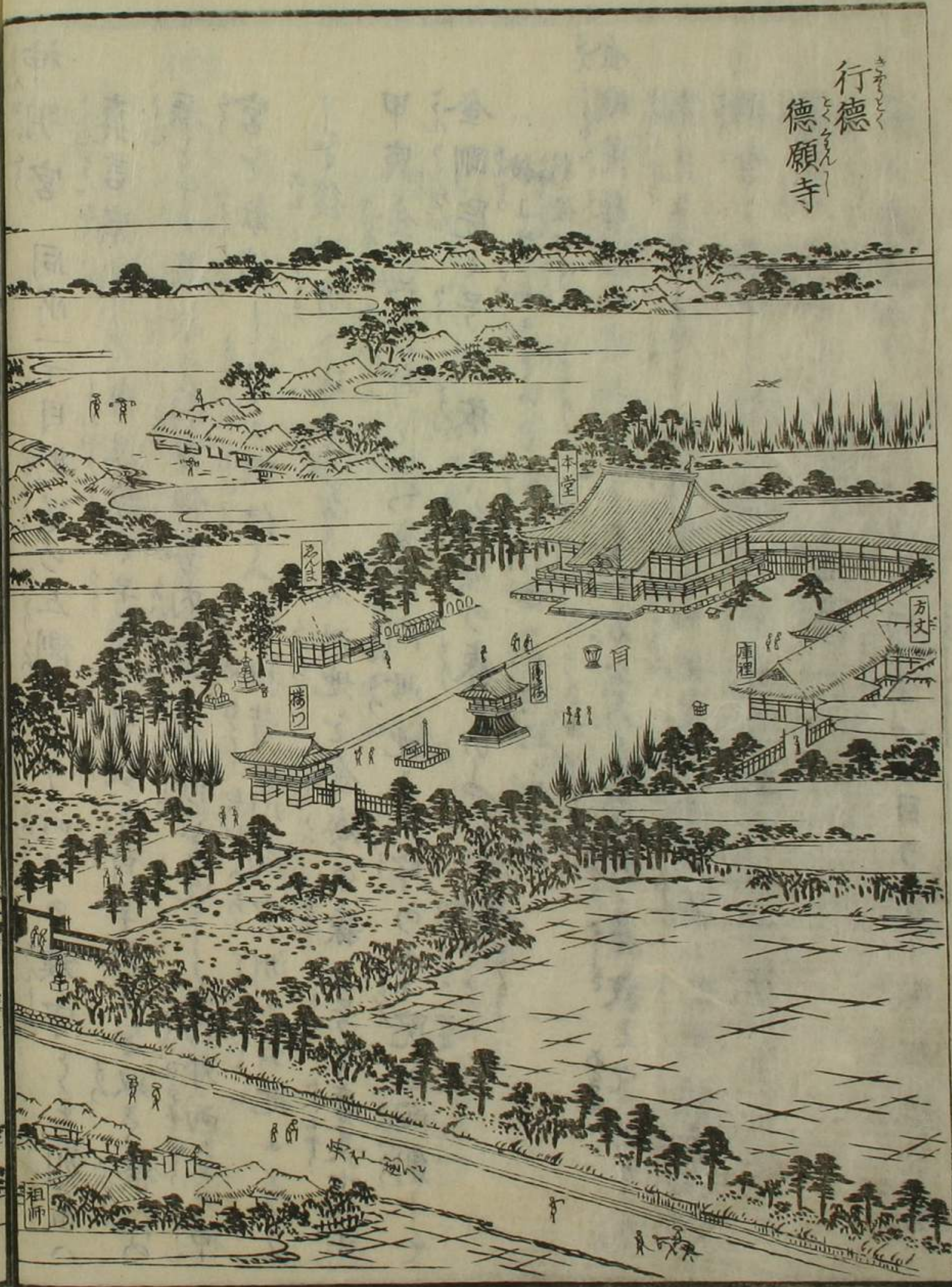
斤量五十二錢目餘

唐銅のやくやく甚古色あり
 惣長サ三寸二分劍の裏延板
 鈴大サ三寸回り内小石一宛
 あり鈴の口一寸八分劍先より
 元まで二寸三分



行徳八幡宮 本行徳三丁目道より右側あり別當八同所一丁
 目自性院兼帯を此地の鎮守や〜毎歳八月十五日祭祀を
 行ふ

神明宮 同所一丁目街道の左側あり此地の鎮守とて別當ハ
 真言宗や〜自性院と号す毎歳九月十六日を以て祭祀の
 辰とす其祭る所を伊勢内宮の土砂を迂〜内外両皇大神
 宮を勧請し〜相傳ふ當社昔ハ川向中洲と云地あり
 後此所へ迂せり又此地を金海の森と号く慶長十九年
 甲寅金海法印とつる沙門此地一字の寺院を開創して
 金剛院と号し依て金海の森と云地を
 金剛院今ハ
 按て葛西志とつる書は行徳ハ金剛院の開山基
 行徳の地と云り〜かか地名とせり由記せり
 金剛院廢址 當寺より南の方あり所は屋敷と字せり是
 則先よつる處の金剛院の旧地なり金剛院ハ羽州羽黒山法
 漸寺は属せり〜其昔は徳有驗の山伏住り〜に
 竟は此地名とある〜云傳ふ
 海巖山徳願寺 本行徳の驛中一丁目の横小路船橋間道の



左側あり浄土宗あり鴻巣の勝願寺は属も當寺往古
曾光庵あり草庵あり慶長十五年庚戌閑山聰蓮社
回譽不残上人寺院を開創し阿弥陀如来の像を奉る
丈三尺佛工運慶の作なり往古鎌倉二位の禅尼政子の命
あり是を造る遙の後天正十八年あり一品大夫人崇源院殿
鎌倉より移しあり持念あり後大超上人は賜り又
當寺弟二世正蓮社行譽忠残和尚當寺は安置なり
あり十七世晴譽上人殊道光普く境内閻王の像は運慶の彫造
あり座像あり八尺あり毎拜正月七日の十日當寺十月八日夜法
會あり最賑り山門額海巖山の三大字は縁山前大僧正
雲卧上人の真蹟なり

鹽濱

同所海濱十八箇村は涉りりと云風光出趣あり去
此鹽濱の権輿は最久しと云始を云り然と天正

十八年關東

御入國の後南總東金へ御遊獵の頃此鹽濱と云るかたせ
られ船橋御殿へ塩焼の賤の男を召し製作のりと具し
召れ御感悦のあまり御金若干と賜り猶未永く鹽竈の煙
絶を嘗て天下の寶と云り旨釣命ありしり以来

寛永の頃迄

大樹 東金御遊獵の御ハ御金杯賜りて後風浪の災ありし
頃も修理を加へありし事此地は鹽を焼くは九一十
御入國の後日あり此は徳の鹽濱への船路と
有餘年ありたりと又同書は天正十八年

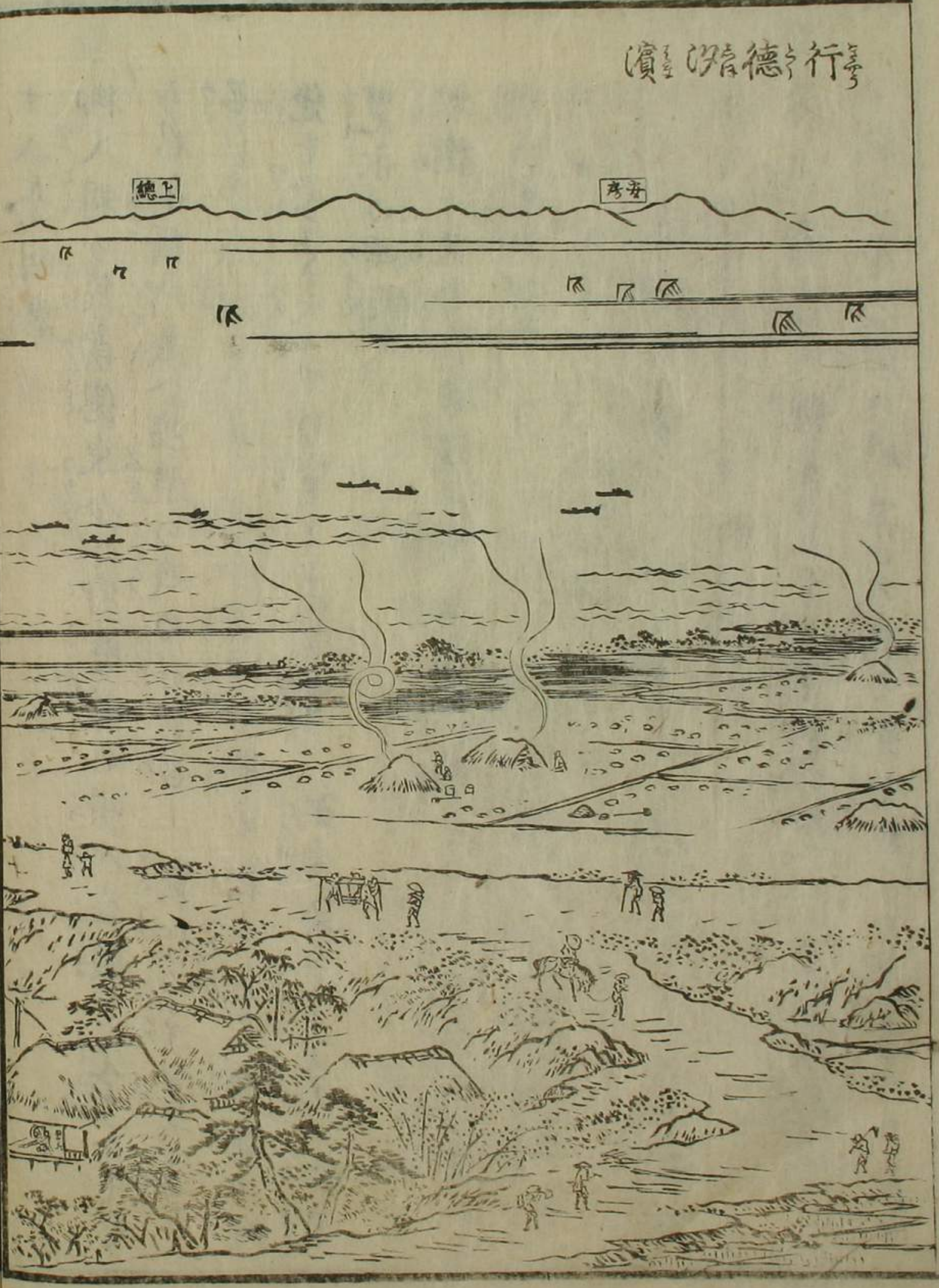
此地の鹽鐵ハ製他ハ越堅強なり保り久しと東八州
悉く是を用ひて食料の用とせ

甲宮

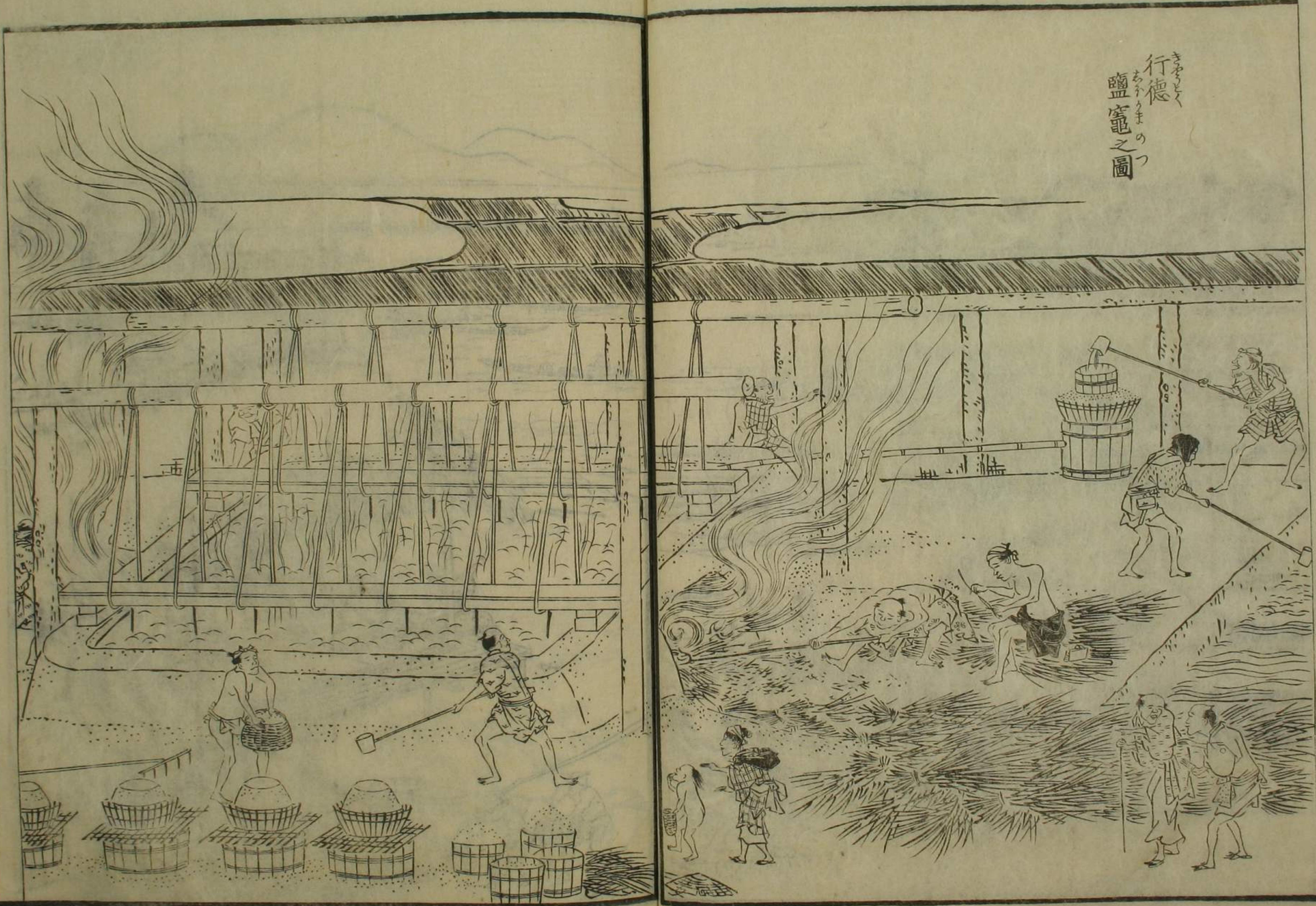
行徳入口の繩あり其由来由今知へり土人或傳へり
云國府臺合戦の時某の大將の堯を祀りしとありん



濱 以 德 行 号



行徳
あぢまのつ
鹽竈之圖





徳之行



當社ハ行徳ハ藩宮の

別當兼帶御記す

行徳の東の海濱高谷村浄土宗了極寺

日光大師鏡御影 安を日光大師鏡を照しく自己の姿をうつし畫るる

御影なりとしり 土俗錦の御影と稱せり 當寺は僧正祐天和尚真の

塔婆あり 奇持あり 昔此地は長島殿と稱せし領主あり

長島湊 葛西長島と一雙の地あり あり此地は住せし

梵音寺の座あり 觀音 相傳ふ太田道灌の頃ハ國府臺の湊は船と

泊す其後野州奥州常州德州等の國々高瀬舟の便利よき

を用ゆるありしより行徳へ運送するありし

永祿二年小田原北条家の分限帳は太田新六郎所領の中は葛西長島高

新城と云く 萬葉集に稱し作り活字板 田名を太井河と云く

利根川 源平盛衰記に利根川と云く 東鑑等の書に云く

又清浦興義撰云下総國の郡の中は大河あり 井と云く河の東は葛西の

今武蔵國に屬せし又北条五代記國府臺合戦の条下はかみ川と云く

行徳を流るる高利徳川と云く水原ハ上野國利根郡文殊

嶽の山谷より發し高利川吾妻川烏川碓井川及び信州の

國郡より出る所の諸流合し武州幡羅郡に至り一河となる

又上州渡瀬川も利根川落合栗橋より合流し一流ハ北條小

入關宿本丸等の地ハ傍る東流し鉦子や海小歸を是を

利根川と号す 一流ハ武蔵下總の間を南へ流れ國府

臺の下を流徳の方へ曲流し海水小歸せり 是を新利根川

と云く侍中群要に散位と云く西宮抄に大節と云く

按侍中群要に散位と云く西宮抄に大節と云く

と云く公事根源云大節は刀祿也と云く

又朝野群載に檢非違使廳下刀

祿職に云く五位以上は各目なり

又朝野群載に檢非違使廳下刀

延喜祝詞式は倭國の六河縣能刀祿男

里長防冷などとも初日大頭と云く

神小毎歳正月初日大頭と云く

内あり是を位と云く各六位

あり是を位と云く各六位

あり是を位と云く各六位

宣旨あり祭は... 御東の... 皇朝文字と借

万葉集 刀禰河泊乃可波世毛思良受多多和多里奈美 爾安布能須安敞流伎美可母

神樂註秘抄 篠本 未

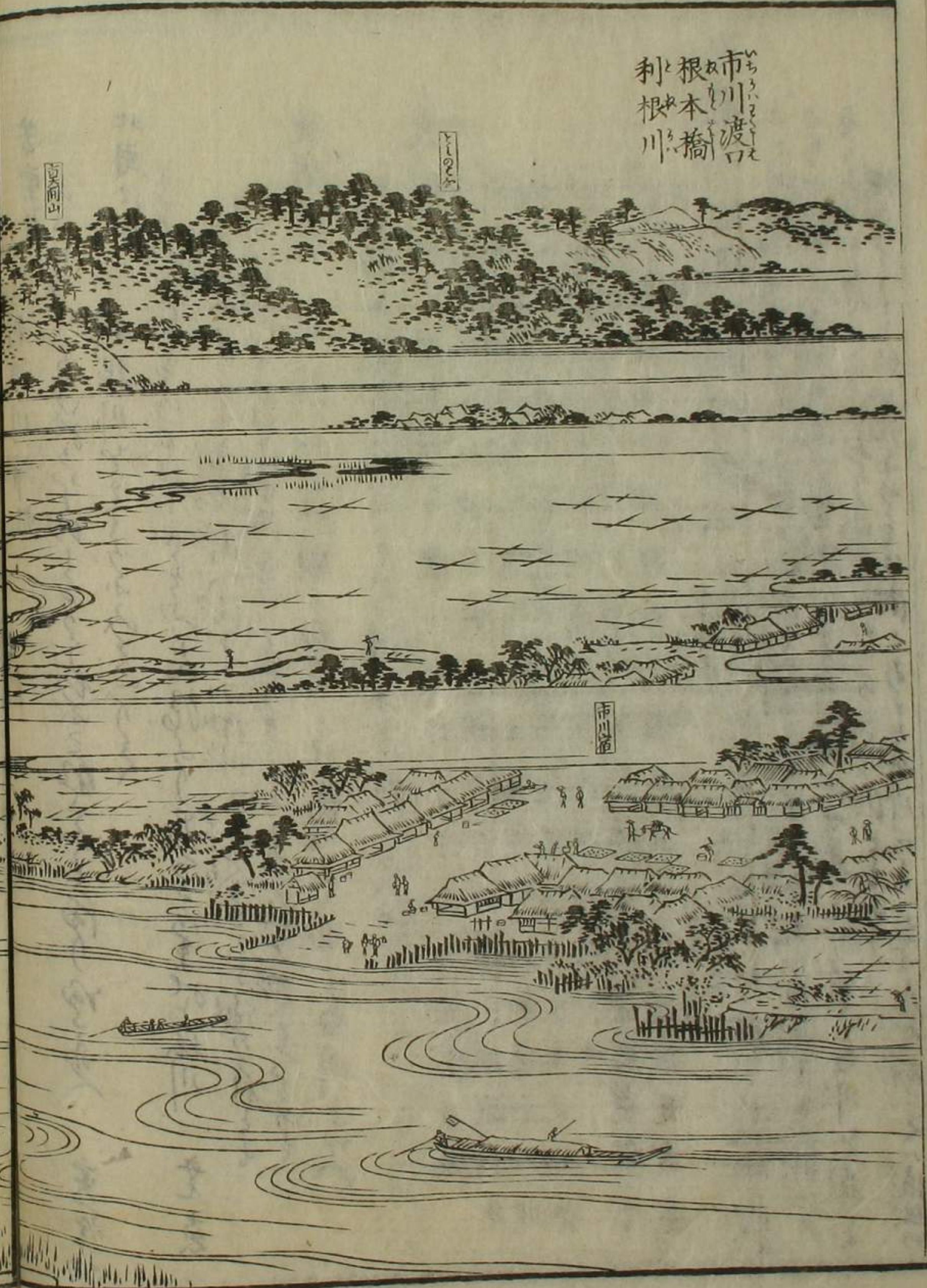
篠のけハ社をそわれめと篠川の石をゆめ... 夫木抄

芳雲集 利根川帰帆 北國行

更級日記 下川... 利根川とそらうみまきり

東鑑曰 治承四年庚子九月二十九日戊寅中略 江戶太郎重長依令與景親于今不泰之間試昨日

迦羅鳴起願 新利根川の水流なりと... 土人云く...



里依あゆりつてとてかめとてお唱せしもあるへりす

市河城址 其地今あつり

義経記云治承四年九月十一日武藏と下総の境にありし市河の庄にありし

ありしあり青い松戸を鎌倉大草紙に上杉憲忠より今度中務入道了心の子息實胤自胤二人を取立下總國市川の城小楢

籠康正二年正月南圖書藻田出羽守其外大勢指遣一教度

合戦と同日十九日終小城を責落を藻田河内守八関宿より打と出

武州足立郡を過半押領し市川の城をとる云

根本橋 市河の渡口より總寧寺へ行間の小川に架を此地を根

本村といのり号とを橋下を流るる真間の入江の舊跡より

發せし水の水流なり

安國山總寧寺 市河の驛より北の方の丘利根川の流に傍てあり

曹洞派の禪林なり関東の僧録司三箇寺の一負たり

富田大寺武藏越生本尊ハ釋迦如来開山ハ通幼和尚といふ當寺

往古ハ近江國にあり天正三年乙亥北條氏政當國関宿此

地小移をされと屢洪水の患あり寛文中竟は此地小引

とあり惣門の内右小鹽竈六社明神の社あり陸奥の摸なり

とあり大田道灌手植櫓と称せり大門の通り列樹の中下馬の

石碑小相對して右の傍にあり又客殿の脇小梅の老樹あり是ハ

道灌親裁す所と當寺より涼師道正庵の解毒丸を出せり

國府臺 總寧寺の辺より真間の辺迄の岡をまゝかく称せり

北条五代記云古き文ハ國府臺小舟代嶋岱とも

州栗橋の西にあり此地を云ふは和名類聚抄に下総乃國

府ハ葛飾郡にありと記せり依考する國府の近き辺にあり

丘山あれハ國府臺といふ号たり

せしむる葛西昔ハ下総小属せり永正六年の宗長

の府のちを半時とす葛西の津浄土門

とあり浄土門とす葛西の津浄土門

葛飾郡ハ大郡ありハ利根川と國府を中央小定めり必東を葛東と呼び以西を

其二
古戰場



國

府ふ基き古こ戰せん場ばう

總そう寧ねい寺じの境けい内ないま

其その舊きう跡せきなり文明ぶんめい十じゅう年ねん

七月しちがつ北きた總そうの一いつ揆くわい白はく井せいの城じやう小せう楮すし籠ろうりる項かう太たい田てん持ぢ資し兵へいをを祭まつして

此この地ち小せう陣じん城じやうをを取と立た件けんの一いつ揆くわいをを攻せ落らくしる程ほどの究きゆう竟けい乃なり要よう害がい

なりなりこれこれ八はち天てん文ぶん六りく年ねん中ちゆうもも或ある小せう弓きゆう又また作しやく御ご所しよ足あし利り左さ兵へい衛ゑい佐さ義ぎ明めい

兵へいをを起おこし小せう田てん原げんをを攻せんとし事ことななるる事こと小せう田てん原げんをを渡わたりて其その陣じんあり

これこれ八はち同どう年ねん十じゅう月げつ四し日にち北きた条じょう氏し綱なう及および氏し康かう小せう田てん原げんをを進しん發はつし同どう五ご日にち

鴻こうの臺たいの陣じんをを責せむ戦せんひ利りあり義ぎ明めい父ふ子し并ならび舍せ弟てい基き賴らい共とも小せう討たう

死しも又また永えい祿りく七しち年ねんの八はち大たい田てん新しん六ろく郎らう齋さい兄けい弟ていの輩はい小せう田てん原げん小せう賢けんき同どう苗めう

美み濃のう守しゆ資し正せい入にゅう道だう三さん樂らく弁べん及および里さと見けん安あん房ぼう守しゆ義ぎ弘こう等とうと此この地ち小せう屯とん

これこれ八はち小せう田てん原げんより討たう手てとして遠とほ山やま丹たん波は守しゆ同どう隼しゆん人じん佐さををむむら

む故ゆ小せう太たい田てん兄けい弟てい相あひ圖つ相あひ違ちがひて武ぶ州しゅう岩いわ附つへ落おち行ゆり然しかも北きた条じょう

氏し康かう父ふ子し小せう田てん原げんより馳ち向かうひ同どう年ねん正せい月げつ七しち日にち八はち日にち大たい小せう戰せん小せう依いる

氏し康かう父ふ子し小せう田てん原げんより馳ち向かうひ同どう年ねん正せい月げつ七しち日にち八はち日にち大たい小せう戰せん小せう依いる



總寧寺
羅漢井





總寧寺晚眺
 荒城千仞沒 蕭寺上方開
 山斷江帆出 跡迴郊樹來
 磬鐘餘鹿野 戰代古鴻臺
 落日斯時恨 臨風起客哀

南郭

國府臺
 斷岸之圖



國分寺



義弘三樂の輩終小敗走也

以上諸書に載る

殿守臺旧址

同一境内にあり上小富士浅間の小祠あり

白檀多し

石櫃二座

同所あり寺僧傳云古墳二座の中北のものを里見越前守忠弘の墓ありとの一ツハ其主詳ならず

或云里見義弘の合葬正木内膳の石櫃なりと中古土崩れりといふ今石櫃の形地上小あり其項櫃中より甲冑太刀の類ありひ金銀の鈴陣太鼓其餘土偶人等を得たりと

分其二を存して徳寧寺に収蔵せり

鐘

淵 同所新岸の下利根川の水を号く傳云里見氏乃陣

鐘此淵に沈没せ故小号とす

鐘の水中に落ち入り多かりと此鐘ハ船橋慈雲寺の鐘ありと云此地へ持来り

國府城址

同所徳寧寺より東の方を以て往古國府五郎某の人の

居城なり一う慶長中より没収せり

國分山

金光光明寺 同所東の方國分寺村あり今ハ新義の真言宗

國分山

中々京師三寶院に属せ本尊藥師如来の像ハ岡山行基大士の

作脇士の十二神將ハ運慶の彫像なり

聖武天皇の所願中々毎國に置け所の國分寺の一なり中興開

山と宥天法印と号け本堂の額ハ金光光明寺の四字を畫せハ智

積院僧正運慶の筆なり

樓門 樓上小古佛釈尊と安置を兩創

釋迦堂 本堂の右にあり平素ハ釋迦

天王の像ハ上古の物やと云希有なり

釋迦堂 中々丈六あり左が帝釋梵

天王の像ハ上古の物やと云希有なり

釋迦堂 中々丈六あり左が帝釋梵

釋迦堂 中々丈六あり左が帝釋梵

釋迦堂 中々丈六あり左が帝釋梵

釋迦堂 中々丈六あり左が帝釋梵

釋迦堂 中々丈六あり左が帝釋梵

釋迦堂 中々丈六あり左が帝釋梵

釋迦堂 中々丈六あり左が帝釋梵

釋迦堂 中々丈六あり左が帝釋梵

延喜式主稅式曰 下總國公廨各四十万束國分寺

料五万束藥師寺料三万五千束文殊會料二千束

藥分料一万束下畧

古笈一 權大僧都觀學院慶長六年と彫あり

古證文二通 一通とも天正十三年二月三日とあり

小田原北條家制札一通 興小正月十四日遠山左衛門

古笈一 權大僧都觀學院慶長六年と彫あり

鏡石

真間の弘法寺より
國分寺へ行方の
田畔石橋の傍に
溝の中に入りて
此石根地中に入り
其際をあらす
依要石とも号く
るとあり



當寺往古ハ伽藍魏々あり一とありあざとの星霜を経く大小衰
廢一今ハ昔の万々一を存せざるも當時の礎石と稱せざるも堂前小
あり今の寺境ハ大田道灌の頃の陣屋の旧跡ゆく古の寺境ハ乾の
方ありり今ハ畑とあり

内膳山 國分寺より東の方一丁計を隔てる丘を以て往古里見

義弘の舎弟正木内膳の陣營の地とあり一とのみ

鏡石 弘法寺より國分寺へ行方の田畔石橋の際の水中にあり

此石根地中に入り其際をあらす故一小要石とも号くとあり

土人此石橋ハ國府基にあらず石棺の蓋なる由云傳ふ

持國坂 國分寺より真間へ行方の坂を以て古ハ此地ハ國分寺の

四天王の内持國天の堂舎あり一故小号とせるとあり

真間山弘法寺 國分寺の南にあり

市河村日蓮大士弘法の地ハ
一六門家と稱する所の其一員たり日頂上人を以て開祖とせ

真間
弘法寺

我
の
ま
の
橋
日蓮

入重
玄門
倒修
の意
九事
を
こ
ろ
人
を
せ
る





本國院日頂寺師ハ六卷借の中にて伊豫阿闍梨と稱せ富本常忍の子なり文永四年
 丁卯日蓮上人が就く得度也弘安五年壬午上足の第五とある日蓮上人の滅後守塔居士
 と管齋して本國院と号し土人ハ山本坊と稱せ正安元年己亥父常忍寂の後哀とつ
 々々八月十二日亡と去り終つて依示寂の年月其終焉の地をあるす
 といを寺院をりつて本堂を釋尊の像を安を富本常忍嘗
 といを忘時とすといり
 造り當寺小奉安を日蓮上人日頂師を祖師堂ハ其右小並入内小宗祖上人の
 して點眼せり賀の書を賜ふ
 像を置此像ハ日法上人の作なり支院十餘宇各磴道此下に
 列せ大門ハ松の列樹中々六丁程あり
 楓樹 釈迦堂の前あり今ハ枯株となり其形を存せざるをむりハわり四五丈ハ
 遍覽亭 古文の構のありあり額ハ遍覽亭と題せ黄檗千保和尚の筆跡
 實ハ大城甲相の聯云ふより霞横らるる又こゝハ房総の海水遠く聞け
 實ハ我里の風光を賅へり
 樓門 石燈の上ハ簞ゆ左右の金剛力士ハ仏工運慶の作なりといり全縣黒色ハ
 當寺往古ハ真言瑜伽の古刹なりといり日蓮大士此地ハ遊化の頃
 寺僧大ハ宗意を論し竟ハ大士の化導ニ帰依し宗風を改
 轉せるとり
 或人云西新井邑総持寺不安とある弘法大師の眞像ハ
 當寺改宗の頃かこゝに遷しまわるといふ日統叔曰了性

真間の弘法寺に住す或曰日常と問答を屈を請ふ逃れり日常衆徒を化す寺母之本化の道場と云云又先徳記を考ふ則東河田谷天台宗の中より性と云あり本文小宗祖上人と問答せし住侶の名を住さそおとくを此子性と云あり

當寺 什宝多きり中を宗祖上人及び諸徒の真筆の曼荼羅消息の類ひ数通あり悉く奉ふ不違每歲九月九日より十八日迄法華經千部讀誦十月十三日ハ宗祖上人の忌日たり御影供と修行せり近在の道俗群衆を

真間浦 同弘法寺の前の水田の地を以勝鹿の浦といふ也此所のゆを云あり土人云昔ハ真間の崖下を浪打寄たりと

万葉集 可豆思加之麻萬能宇良未乎許具布禰能布奈妣等佐和久奈美多都良思母

夫木抄 此所のゆを云あり土人云昔ハ真間の崖下を浪打寄たりと

真間濱 地なりありと云あり

真間入江 是も同い辺なり是れも今ハ耕田とあり又ハ民家林藪ふ沿革して古も違へり

万葉集 勝牡鹿乃真々乃入江爾打靡玉藻荊兼手兒名志所念

續千載 夫木抄 此所のゆを云あり土人云昔ハ真間の崖下を浪打寄たりと

真間於須比 義なりと又謂阿闍梨の所代証ふまおまひハ駿河能宇美於思敬爾とあり夫木抄に磯辺ありとハ本居宣長翁の考へを以て手古奈、磯辺ありとハ浪えをささきとハ意ありとあり磯辺といふをささきと云れり

可豆思賀能麻萬能手兒奈家安里之可婆麻赤
乃於須比爾奈美毛登杼呂爾

真間繼橋 弘法寺の大門石階の下南の方の小川小架を所乃

あつ川の橋の中あつ小橋をさしてつり
或人曰古へは兩岸より板をせ
中梁を打ちつり故に継とて

万葉集

安能於登世受由可牟古馬母我可都思加乃麻
未乃都藝波志夜麻受可欲波牟

新勅撰

風雅集

猶麻也昔のまは終極をいれすまうひまう那 兼田
有る不越り波はか門くやう門くくま間の終極 雅経

同

かつはまの海風吹あたり夕波越るよとれつきま
朝村
被小朝村の和奇よよのつきまといあつ水の激ふけりといふ意あり
山城の淀といふあり

入重玄門倒修凡事の意を

らふ人を後しとせし御小意をまことのまは終極 日蓮

真間手兒名舊蹟 同所継橋より東の方百歩さうふあり手兒

名々墓の跡なりといふ後世祠を営むこれを奉り手兒名明神
と号し婦人安産を待り小兒痘瘡を患ふ類ひ立願して其

奇特を得とて祭日ハ九月九日あり
神弘法寺の中興弟七世日與上人の
靈告ありあつて崇めまつり春墓文集継橋記手兒名のりを載りといふ

清輔與儀抄云 是ハ昔下総國勝鹿真間野の井小水汲下女

なりあまは麻衣を着てささく水と汲其容貌妙なり

貴女ハ千倍せり望月のめく花の咲らめくあま立ると見人々
相競る夏の虫の火入ら如く湊入の船のめくなりこ小女思ひ

あつひく一生のそとを存し其身を湊し投中畧
又かつはまの海風吹あたり真間乃入江真間此

継橋真間の浦真間井真間の野なとよめるこれ此あり
云々

万葉集

過勝鹿真間娘子墓時作歌

山部宿禰赤人

古昔有家武人之倭文幡乃帶解替而廬屋立妻
問為家武勝牡鹿乃真間之手兒名之奧擲乎此
間登波聞杼真木葉哉茂有良武松之根也遠久
寸言耳毛名耳毛吾者不所忘

反歌

吾毛見都人爾毛將告勝牡鹿之間間能手兒名
之奧津城處

詠勝鹿真間娘子歌

高橋連蟲麻呂

鷄鳴吾妻乃國爾古昔爾有家留事登至今不絕
言來勝牡鹿乃真間乃手兒奈我麻衣爾青衿着
直佐麻乎裳者織服而髮谷母搔者不梳履乎谷
不看雖行錦綾之中丹褻有齋兒毛妹爾將及哉

望月之滿有面輪二如花咲而立有者夏蟲乃入
火之如水門入爾船已具如歸香具禮人乃言時
幾時毛不生物乎何為跡歟身乎田名知而浪音
乃驟湊之奧津城爾妹之卧勢流遠代爾有家類
事乎昨日霜將見我其登毛所念可聞

反歌

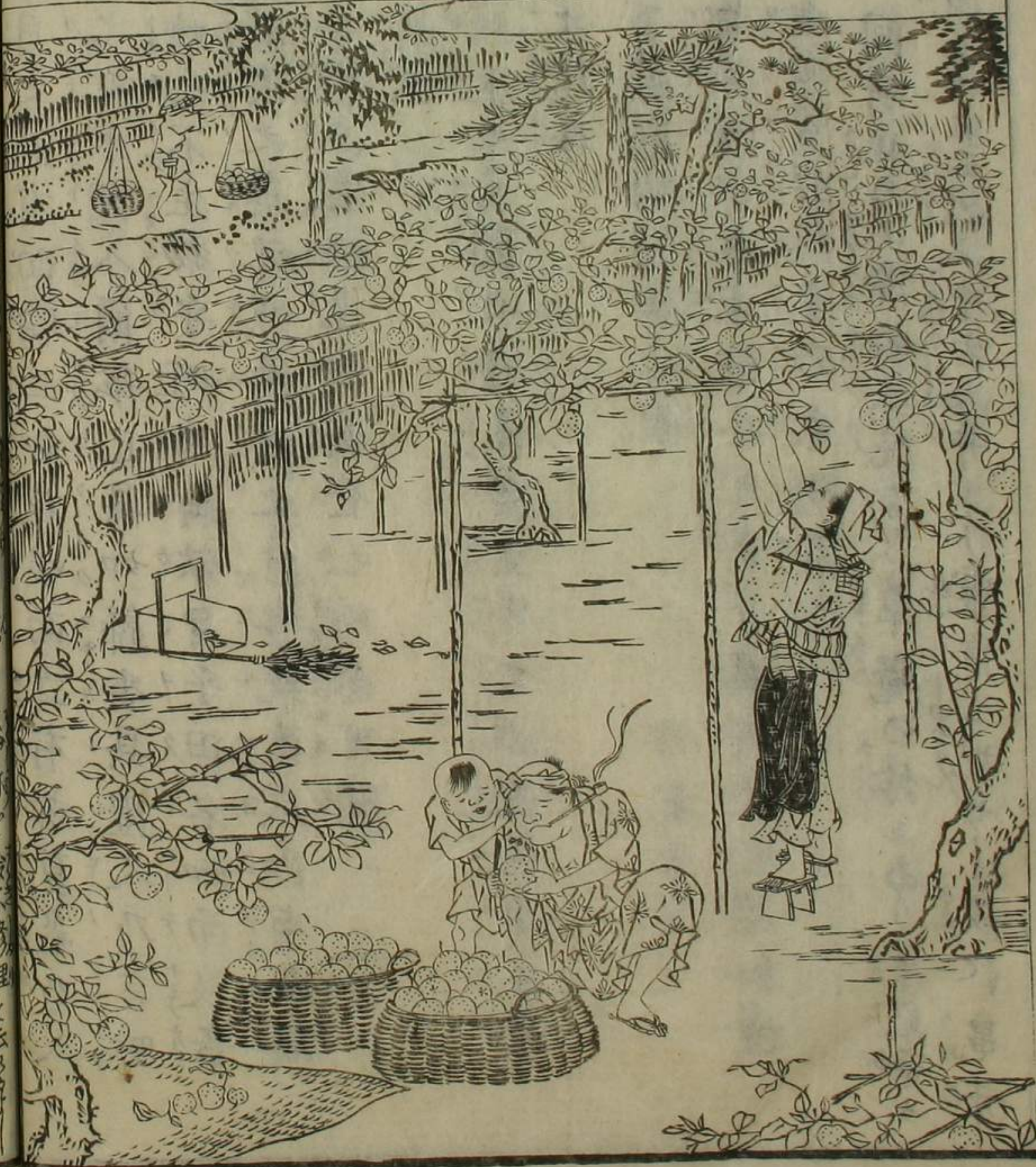
勝牡鹿之真間之井見者立平之水挹家牟手兒
名之所思

下總國相聞往來歌

作者未詳

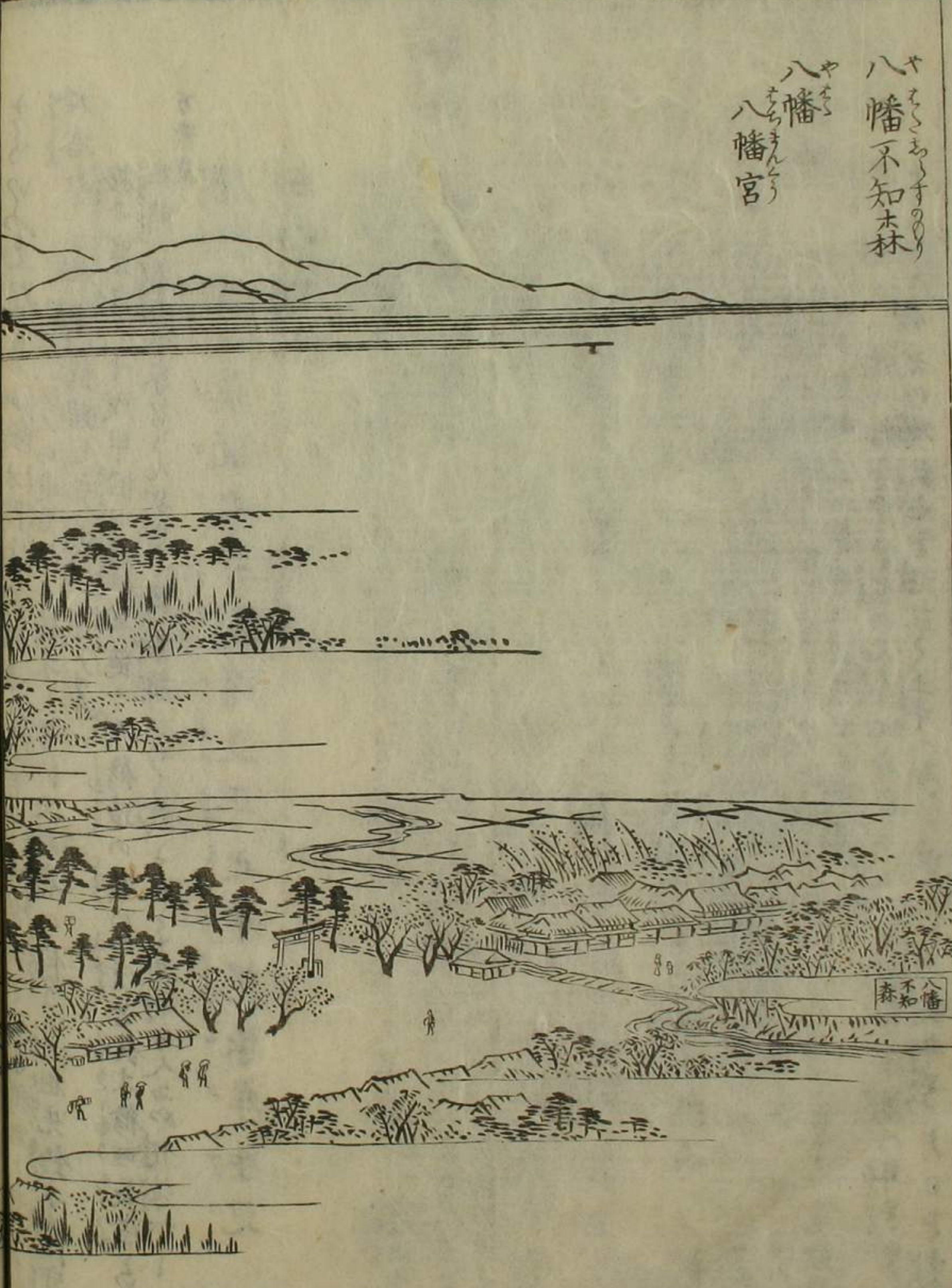
可都思可能麻末能手兒奈乎麻許登可聞和禮
爾余須等布麻未乃氏胡奈乎
真間井 同所北の山際鈴木院との草庵の傍あり手兒奈乎
汲る井ありと云傳の中古此井より靈龜出現せ故に亀井

梨園
真間より八幡へ
修道の間
あり二月乃
花盛ハ雪を
敗ハ似たり
李太白の詩
小梨花白雪
香と賦
も落ちり



石塔ありこれ同修理と云人遺立也
按不寛文八年戊申相州鎌倉鶴岡修造の時の工面と鈴木修理長常と云
然時ハ番面の家なる人牧雀岡梁牌ふかく載これとも又別の人も考べ
万葉集
勝牡鹿之真間之井見者立平之水挹家牟手兒
名之所思

葛飾八幡宮 真間より一里あり東の方八幡村あり
常陸并房総の海道あり
驛あり鳥居ハ 別當ハ天台宗中々ハ幡山法漸寺と号ハ本地堂
あり阿弥陀如来を安置 二王門ハ表の左右ハ金剛密迹乃
像裏ハ多聞大黒の二天を置り 神前右の脇ハ银杏の大樹
あり神木と号
此樹のうろちの中ハ常ハ小蛇あり毎年八月五日祭礼の時音楽
を奏せ其時数万の小蛇杖上ハ踊れ出つ衆人入々これ奇なり
古鐘一口 寛政年間枯木の擲を常と号 其文三尺七寸あり竜頭の
側ハ應永二十一年午三月廿日と彫あり
按小應永ハ鐘の銘ハ元亨元年より凡九十有余年後の年号あり
と一々ハ應永の頃乱世を恐れ土中へかき埋め多時其年号月日を刻



や
 ち
 ち
 ち
 の
 八幡不知林
 や
 ち
 ち
 ち
 の
 八幡宮

知極殿

八幡不知林

きりあや

奉右鑄銅鐘
大日本國東州下總第一鎮守葛飾八幡是大菩薩
傳聞寛平宇多天皇勅願社壇建久以來右大將軍
崇敬殊勝天長地久前横巨海後連遠村京虫性動
息鐘曉聲人戰眠覺金塔夜響永除煩惱能證菩提
元亨元年辛酉十二月十七日願主右衛門尉九子眞吉
法印智圓

筒粥神事

毎歳正月十五日の朝此神あり放生會 八月十五日は修行す
其年の豊凶を占むるに神指多し此日神輿渡せしむる
又同日津宮といふあり夕七時頃當社の社人等集り華表の前は擡の如く長き
掛の白布を巻くを建上の方ゆく其白布を結ひ合せく足をかくる代り念願
ある人身を巻くを伴の楹の上へ登り四方を拜し其趣相似たり又津宮掛の
相州日向茶師ありありとあそび推登りたり其趣相似たり又津宮掛の
下は樂屋をまうけ神輿停社ありありとあそび推登りたり其趣相似たり又津宮掛の
歌太鼓の合せく舞ありありとあそび推登りたり其趣相似たり又津宮掛の
祭と唱ふマナハ祭の俗語なり

當社ハ宇多天皇の勅願なり寛平年間石清水正八幡宮を勸
請せし宮居なり遙の後建久み至り鎌倉將軍頼朝卿再ハ朽
傾の社壇を修營ありより封域廣くく社麗くあり又星

霜を盤

今ハ老樹鬱蒼とく上久く社壇とありしを
按小當社ハ國分寺小同一く一國一宮の八幡宮なり往古府中置れ

八幡不知森

同所街道の右ハ傍く一ツの深林あり方二十歩
す往古八幡宮鎮座の地なりと云傳ふ即森の中石の小祠あり里老
云人謬く此中ハ必神の崇ありとて是を禁む故小垣を繞

らてあり
或云わたり平親王將門平貞盛矢よわり秀郷ハ討れ後
六人の近臣と稱する輩其首級を慕ひ此地に至り頃此森の中ハ
入て働を終ふと偶人と頭れりり其後雷雨破壞せり此地を踏者ハハ
必なりありとて大ハ驚怖せり又或人ハ此森の圓帯ハくハ幡の地ハ
地ハ森の地なりハ行徳の持分なりと此故ハ八幡村の中ハ入會とて他の村の
因ハ按ハ幡の地ハ森の地なりハ行徳の持分なりと此故ハ八幡村の中ハ入會とて他の村の
證文ハ下總國ハ幡の地ハ森の地なりハ行徳の持分なりと此故ハ八幡村の中ハ入會とて他の村の
郷田島本家云くハ幡の地ハ森の地なりハ行徳の持分なりと此故ハ八幡村の中ハ入會とて他の村の

曾谷妙見尊

曾谷村長谷山安國寺ハ安置せり當國千葉寺妙
見尊と同木あり其末木を以て彫刻せし當寺境内に王
義之宮あり華表の額ハ晉王公廟とあり烏石葛辰の尊あり

傍に石碑を建つ何の謂れなきを知らず

高石明神社 八幡あり東の方佐倉街道鬼越村深町の入口道より

左の岡あり別當日蓮宗あり泰福寺と号に祭礼は九月

九日なり土人傳云當社八里見安房守義弘の弟南總大多木

城主正木内膳見時徳の墳墓なりと云り

神體ハ劍を帯せ馬軍神の像なりとの

注進の状ハ八幡庄内あり高石神村の地を寄附せしあり又同年二月同胤貞

上人へ附せし證文あり下総國八幡庄高石神南方中島内坪村のありあり

安房須明神社 同所中山の北池田とのあり北の岡あり傳云

里見越前守忠弘の息男里見長九郎弘次の墓なりと云り

今淡島明神と云

北条五代記ハ里見長九郎弘次生年十五歳初陣なり

かけしと持たし一騎あり相模國の佳人松田左京亮康吉遊け細く

落ちて既首を取むとせしと容貌美麗なり花の如き少年なり

と云と思ひしと味を云霞の如く走り首をとり

引箭し携りて故なりと発心し帰國せしと云

葛飾志云昔あり浦小盛賣とのあり或時此を通り

薄曇り霞の如くありしと何のゆゑか

此子也と云ふ男ありしと云

苦止時なり今幸は是を

来りしと盛賣とのことなり

此時既ハ七月孟嘗孟會

下は居らし牌前ハ供

然ハ家の内ありし

中ハ彌地と云ふ

されとありし

をのこみ

これハ不測の思ひ

と云安房頭明神と

つり律と云ふ

假ハ葛飾志ハ

あはれこれ

正中山本妙法華經寺

日蓮大士最初轉法輪の道場あり一本寺なり

船橋街道の左側あり

開山ハ日常上人

中興八日祐尊師

鎌倉大草紙云十葉介貞胤父の宗胤三井寺を討死
せし後此國塔造宮方多新田義貞の孫供たりしと
法苑の学道あり下徳國中山の法苑住持の中興八日祐上人
堂建立あり五重の塔婆を建らしむ後貞上人の七
市下向の時多供して九州へ下り大開寺に浦住し肥前國
九州へ下向し肥前國松玉山を建立して徳州の中山を引
未代迄此所と中山と西山
一寺と号せしあり

祖師堂 日蓮上人の像を安んず 日法師の 額 祖師堂 太虚庵光悦筆

祈禱堂 同所後の 額 祈禱堂 筆者不知 法華堂 洞左ふありふ大七手刻の

置此所大田末明の宅地なり 乘明日常上人の教を受自の宅地を轉して佛宇とし
正中山本妙寺と号し則此堂八其頃堂建し其の傍ありて世俗云飛驒匠作

あり當時宗祖大士最初持法 額 光明法花經寺 光悦筆 堂内外陣の家帯
輪法華説法の道場なり

宗祖大士より常忍へ贈りし消息の写しを板に書く掲ぐ其文云く
沙四寶をもちて一回浮提才一の法華堂造りて靈山淨土にありたり

附八申あけさきとくし
十月廿二日 日蓮判

進上 富博入道後

真書ハ宝庫小収む世不淺四勢とて造りて云信りとの見たり
鬼子女神堂 同左小並み此鬼子女神堂鎌倉の某の堂ありしを移せりといふ
法華堂に在せし頃一尊四菩薩の像と共彫刻ありしと
なり毎月十七日の夜遊在り道俗共信す

竜淵橋 堂前の流 常唱堂 常唱堂ありて常は 泣銀杏樹 常唱堂の
真向私法持の開山日頂上人ハ日常上人の子なり久しく父の勲氣を慕ひ思願を
秘せり能く故に此樹の下に幾回も来りて哭てを帰られしと故に此号ありと

五層塔 同左あり 釋迦多宝ありて當寺十八世 三十番神社 同左
於小堂ありあり當寺の護法神とて 寶庫 彫像其外佛經の類ひを蔵む
毎季十月八日火焚祭を修す

支院三十六字 今破産せしものありて 二王門 額 正中山 日等上人筆
或いハ光院の筆なり

中興開山日祐上人墓 徳門より内左の方小路と入りて三丁より西の方山の中
奥の院 方丈の構の外右の方の小路を入りて三丁より東北の方ありて文應元年

宗祖大士此處にありて百日の前説法あり即宗門最初持法論の道場也
号け大士とて小居らしむ因りて百日の前説法あり即宗門最初持法論の道場也
蓮山法苑住持の跡なり日蓮上人傳小屋形の後小まをり百間ありて思を築

其中は往古大士手刻の四菩薩の靈像也此地に安置ありしとあり當寺第
十二世の住持日珠上人此地を封し法華一万部の経塚を築きおより宝蔵に
安置せし日法上人の作の宗祖大士の影像をうのしとて造りしとあり

開山日常上人石塔 同所道を開く左の方あり石塔の上小草堂とてあり
常忍修院と号し因幡國富城の産中より兼久二年庚辰を以て生る

常忍修院と号し因幡國富城の産中より兼久二年庚辰を以て生る

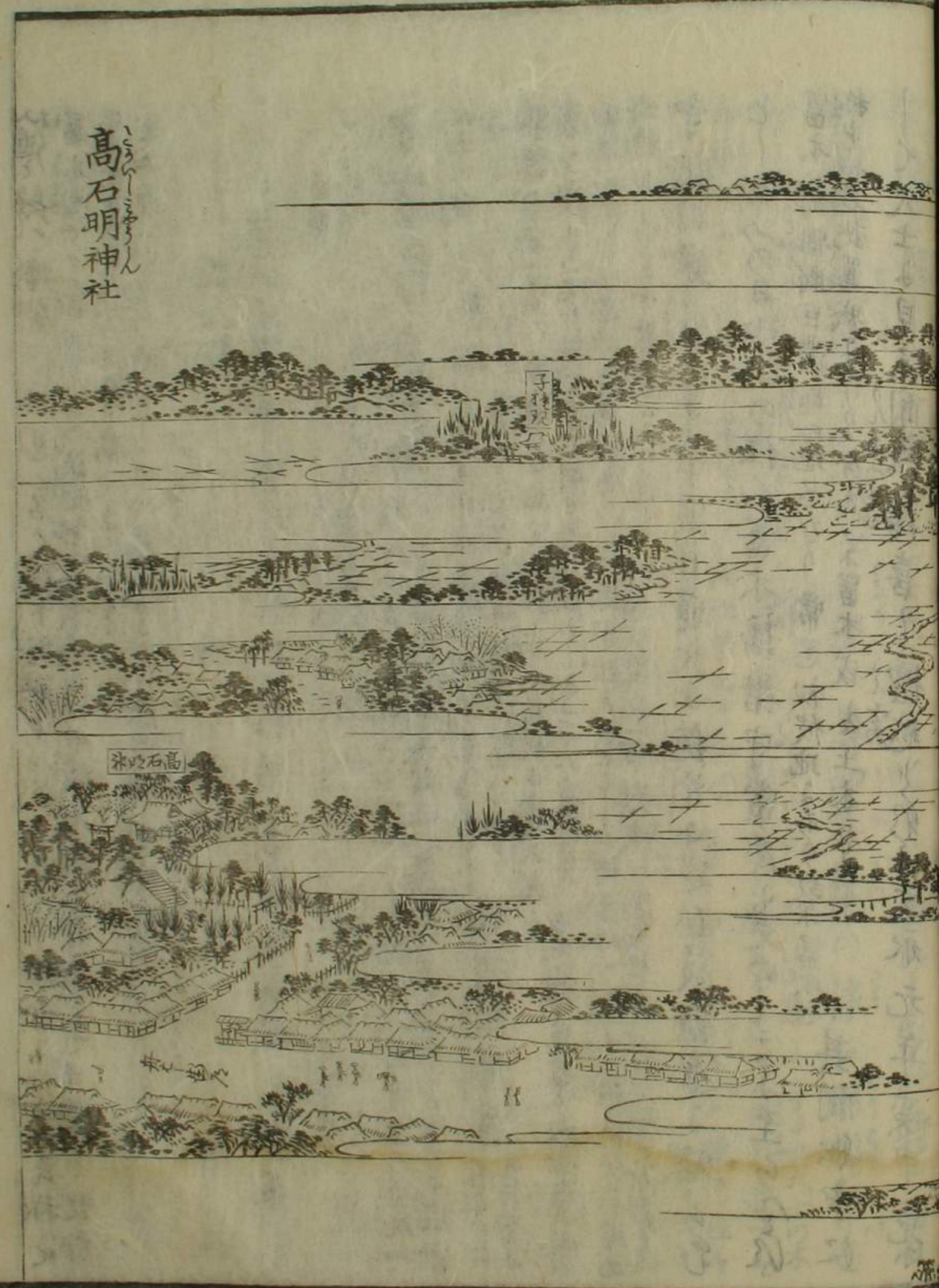
東土産
杉の
葉
あじ
乃
此
月
宗長



妙法華經寺



高石明神社



其二



入道と長て播磨守常忍と名く後下徳國中山邑は後住し鎌倉はは土民稱して
富本郡と云ふ日蓮大士の法化をたぐふ大士の滅後竟小難澁して日常と改む
正安元年三月二十日八十歳なりて化すとの事あり
東土産 ありの徳を以てのり中山の法苑堂を始す一者なり
ありの徳を以てのり中山の法苑堂を始す一者なり

杉のまゝやあゝゝはほのねの月 宗長

寺寶立正安國論 諸山小蔵を承てく四部なり洛の平國寺甲の身延山

同来由 文永五年戊辰法燈日蓮のよあへ 稟推出界書 文永三年九月富本

寺記曰建長六年甲寅日蓮大士徳州小遊以後鎌倉に帰らむ
と一あゝの日中山の住人富本播磨守常忍も又かゝるに至らん

富本因播磨巨濃郡の地名なり常忍初彼地あり故富本と
稱も和名抄罵賊は作り今こゝ富本或を土木とす 其間船中に

宅地を轉々一字を營々大士を以て居らむ此時一百日
の間大士說法あり又大士自親一尊四菩薩の像を彫刻ありて

かゝる安置一法華堂と號けらる 中山記云く宝庫の一尊四大士の未
像二刻十軀あり其一ハ佛形其一ハ 時小曾谷教信 教信姓を
平氏次第

善薩形あり皆大士の手刻と云く此法華堂とのみ 秋本太郎兵衛
及ひ大田兼明等来く檀越を

大士最初傳法論の道場なり今奥の院と稱す 白井の人なり子孫小至り其地一字を
創敷して白井山秋本寺と号く

後宅地をありて梵刹と稱す 衆明ハ五帝を爲し稱す當國中山民部少輔康連の子なり曾富本氏の
のち衆明を以て大士の宗化小傳一子を授く出家せしむ日高上人是之

後中老僧日高尊師父衆明卒むの後日蓮大士の命を應じ
日常上人の教を受其家を改む精舎と稱す 今の正中山
の地是なり

亦先の法華堂を合て一寺と稱す と号す則日常上人を開山と稱し日高師を第二世とす然小佛
心院日現師 當山
十二世 台命ふより寺法を更めより已降
京撰より論番して當山の貫主とあり毎年三月十三日より同

十九日に至るの間法華經千部讀誦七月十五日相撰具初を十月
十三日八日蓮大士の忌辰なるやあり大法會を設く近國の道俗群衆
一々大に賑へり

若宮八幡宮 奥の院の地より一丁をかり東の方叢林の中より富木

氏の鎮守の神なりとの事 中山什物の内正和三年甲寅四月二十一日高師より計
地等之より中若宮御堂中山坊若宮別當職のひふ彼岸田谷中下若云又同什
物正安三年日高師を深られり若宮持佛堂の本と稱せり首題の殿幅あり
然れ其頃ハ別當職を別附置置崇敬尤厚なりと云れり

妙正池 中山より北の方二十町を隔て千束村とのみあり 千束
の池とも号く傳云文應元年庚申日蓮大士十九年富木常忍く假る

所の法華堂入りひ一日の間妙法論を講し群生を教導
あひし頃此所の池靈婦女と化し日く彼地に至りて大士の説法を
聴受し信心衆を越えり一時彼婦女来り大士に向て云く妾今
尊者の法施を冠り一乘の真因を得てを願くハ大士手書

本及ひ自の法号を賜らんを乞大士乃曼荼羅を授けり
又妙正とのみ法号を授けり婦女喜んで去人怪むと跡に隨ひ至
る小此池辺わき其婦女の姿を見失ふ然其を急忽然とて
傍の櫻樹の枝にかりてあり衆人奇とをこみ於て此池の靈なる
事を知り妙正と号け後一社を奉まるとり 其婦女往還の道を曼荼
羅小路と字に或を蛇

妙正大明神祠 同所あり或燒神とも稱せり 蛇瘡を患ふ者祈あられん
念して験ありと云 日蓮
大士は見えく本尊を乞たり 龍女を祀所あり

葛飾明神社 中山より東の方栗原本郷の街道より左へ四町
ちりを入る叢林の中よりあり葛飾の惣社と稱せれとも祭神祥な

のそ同所真言宗萬善寺別當より祭禮ハ九月十五日あり社あり
東の方此林間稻荷の小祠の傍に葛の井と稱する井あり當社此
浄手洗とのみ土人相傳へく此井の水脈龍宮界不通と云瘧



葛飾明神社
 葛の井
 萬善寺
 栗原寶成寺
 萬善寺の庭前
 榎の大樹あり
 三つ八四
 中々枝乃
 あつれ四方へ
 四酒をくあり
 て壯觀あり



疾を患う者此井の水を飲みて験ありとのり
勝間田の池 同所船橋街道の道傍あり此所も栗原本郷村
の内なる本上氏本郷の溜池と唱ふ池より東に寺内村と云池あり
西小高より北に熊野三所推現の宮居あり萬善寺より兼帯
祭祀を祭禮ハ九月十五日なり

万葉

勝間田之池者我知蓮無然言君之鬚無如之

右或有人聞之曰新田部新王出道干堵裡御見勝
間田之池感堵御心之中還自彼池不忍憐愛於時
語婦人曰今日遊行見勝間田池水影濟々蓮花灼
々可憐斷腸不可得言爾乃婦人作此戲歌專輒吟

詠也
勝地吐懷編は右和歌の注に今日遊行勝間田池と云ふは餘國に生ぬ
る也又堵裡は生遊しく勝間田の池を云見ともあるは万葉集堵は都の字
は通ひる然に平城京を云下郡ありとありは雲乎以花鳥集
題字名所和歌集下徳國は清浦也美作とす程松名寄もまゝ美作に
考へ玉皇集は初瀬へ朝りたる勝間田の池と云

打ちたる奈良よ便ありと云
道傍

千載

はもあり地えれをまかむわづらふも所をん
二条大皇
大后宮肥後

後拾遺

おもあせ世のたつた人徳同田此池のたつた人
範永
寂然

新拾遺

か門を此池のわづらひてをまかむを名のまかりるこ
頰伸
はらけ

寺社

奉を經くわづらふ徳同田の池をまかむを
頸伸
はらけ

夫木

か門を此池のわづらひてをまかむを名のまかりるこ
爲相
為相

日

か門を此池のわづらひてをまかむを名のまかりるこ
恙鎮
恙鎮

家集

か門を此池のわづらひてをまかむを名のまかりるこ
家隆
家隆

夫木

か門を此池のわづらひてをまかむを名のまかりるこ
味忠
味忠

日

か門を此池のわづらひてをまかむを名のまかりるこ
大威
大威

家集

か門を此池のわづらひてをまかむを名のまかりるこ
恙鎮
恙鎮

日

か門を此池のわづらひてをまかむを名のまかりるこ
西行
西行

新撰六帖

か門を此池のわづらひてをまかむを名のまかりるこ
和歌
和歌

勝間田池
栗原本郷邑の
地あり故に
本郷の溜池と
号す

万葉集

かみまこ池

池

つれ

ちちす

あし

あつひ

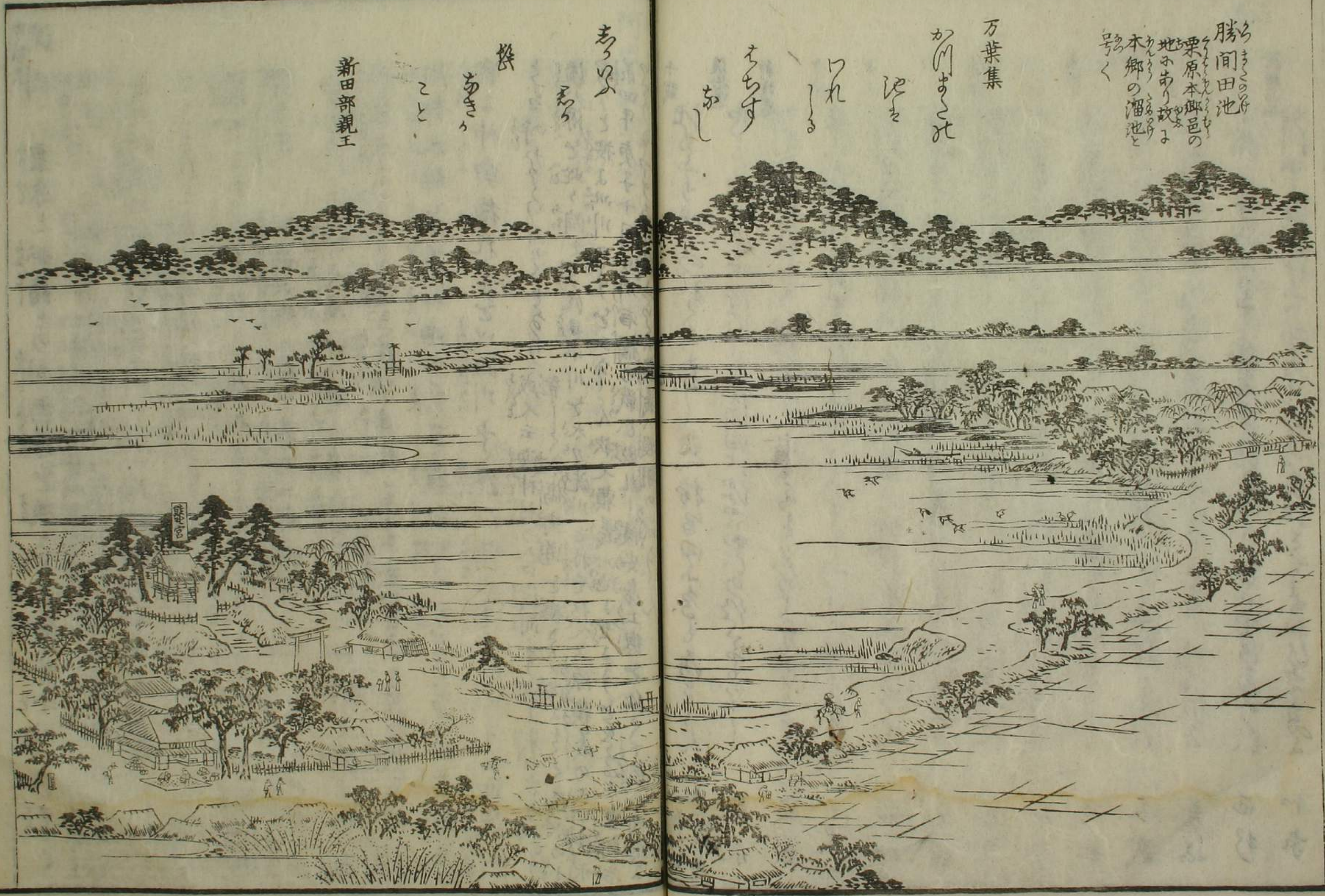
あつ

換

あき

こと

新田部親王



洗川

栗原と船橋との間街道を横きりて流る小川を号く

血洗川とも稱せり千葉藩意富日神社へ神傳云右大将頼朝卿征夷大将軍の宣旨を蒙られ後其威勢実草木も靡くを

幕下はあはれを度々の催促ありしは是に應せし故に頼朝卿

憤り甚しく船橋六郷の地を葛西三郎清重に給ひ清重此地に入

むとせしとも神人及び六郷の農民等三神の神輿を前より昇居

西栗原より支へり防ぎ戦ひ其乱さし止らざりしは終に神官

治部太補基義神輿の前を腹掻切り空しありぬ時乃

戦は神輿穢れしを以此川を洗ひ清めしりし血洗川

とを呼ばりしなり或人云海神村の入口浅間より東の方の山より流る源を蛇の淵と号し見小川を太が洗川と稱し傳云源頼義の太が洗川に

なりと按よ此川の源を云ふは又頼義此地に至りしを頼朝治

承四年庚子十月豆州船橋の戦ひ敗れ安房上總を徑り下総の國府に

阿須波明神祠 西海神村あり 禪宗大覚院奉祀を娑羯羅

龍王を祀ると云 故に此地を海神 耕田と道路とを隔て海行に向く

華表を建る九月日を祭祀の辰とす此日芋を食を旧例とを

故に土人芋祭と号ありはせり 當社小柴を食あり旅人とも人首途に此阿須波の神神小柴を食りて

長途の安全を祈りまゐりしと云傳へ奇林良林は下総國阿取波宮とまは社ハ

神の誓ひあり小柴を立く祈りありと云云

万葉集 爾波奈加能阿須波乃可美爾古志波佐之阿例波

伊波々牟加倍理久麻互爾 帳丁若麻續部諸人

新千載 名寄 今もいふかへさめやゆらぬあすへの宮ふ少柴さひも 俊頼

石芋 當社の入口あり里嶺云く往古弘法大師東國化度の時日くれ及ひ此

ありし是を許ししと云ふは大師那見の華を教導めり人方便まてその家の

傍の芋を加持して石と形ありしを此方ふ其芋四時とも不腐れす一七年に

生すといふ

意富日神社初鎮座地

船橋驛舎の入口海神村御代川氏某

地あり日本武尊此海上中々八咫鏡を得る伊勢太神宮

の正體と鎮座あり旧跡なりとの今意富日神社の地より此

昔ハ零川ハ作ラ零ハ水の深キを以テ訓義ナク日本武尊を導ク事ハ其子孫今猶連綿ナリ

夏見厨海神村の北の方あり今東夏見西夏見と唱へ二二分る

古伊勢神の神領あり意富日社の神主是を務たり

とわり

神鳳釵曰 伊勢太神宮造替遷宮事曰食米慶々

注文 二所太神宮御領諸國神戸御厨御蘭神田名田

等合 下總國

夏見御厨 上分布三十段口入三十段一名船

橋二百丁

神鳳抄其餘下總國あり相馬遠山形葛西猿俣萱田神保等共ニ合ナリ

爾保村里能可豆思加和世乎爾倍須登毛曾能

意富日神社
舊地



可奈之伎乎乃爾多氏米也母

かくよめハ古葛飾の早稲をもち神ノ新嘗なり一母をいへりありと此和奇の
ろくろを此の早稲をもちて神ノ新嘗なり一母をいへりありと此和奇の
早稲をもちて神ノ新嘗なり一母をいへりありと此和奇の
早稲をもちて神ノ新嘗なり一母をいへりありと此和奇の
早稲をもちて神ノ新嘗なり一母をいへりありと此和奇の
早稲をもちて神ノ新嘗なり一母をいへりありと此和奇の
早稲をもちて神ノ新嘗なり一母をいへりありと此和奇の
早稲をもちて神ノ新嘗なり一母をいへりありと此和奇の

船橋 驛舎なり海神村及び九日市場村五日市場村等の三邑の

總名あり古の神領の地なり 舊名を湊郷と云と相傳往古

日本武も東征の時此地に至りあひ海上あり一面の神鏡をぬ

り 其地を海神 依て其地は神鏡を遷し 然る頃ハ水魚

月や早お續官軍大なる尊其沙穡あり一ハ驗あり二ハ

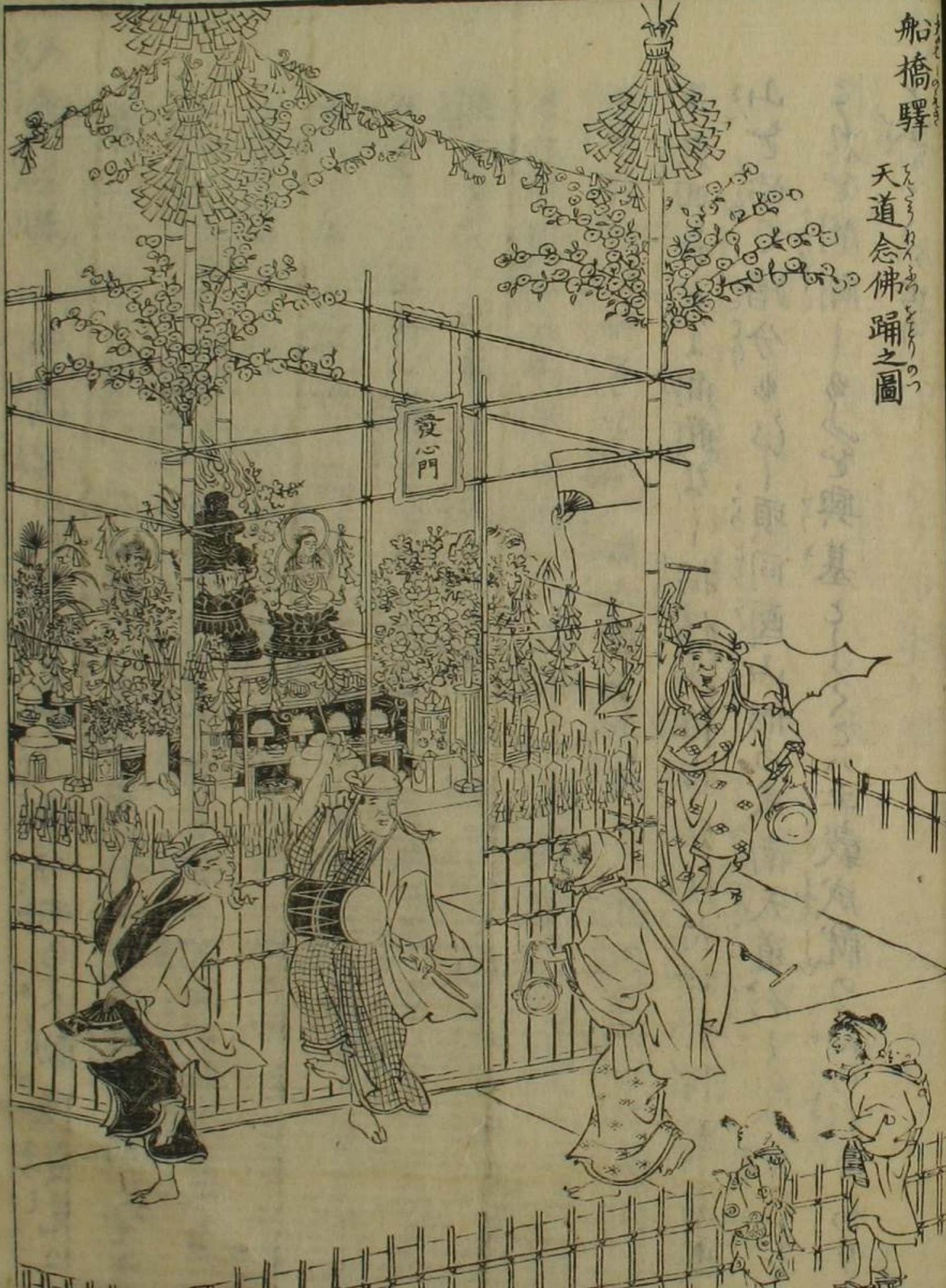
日の間大雨降續官軍努むとて竟ハ凶徒を亡し一ハ後湊

郷の辺洪水あり神鏡の宮所へ移遷ふべき便なり一ハ船城

浮や橋とありゆふり此地名登るといふ 東鑑曰文治二年丙午三月十日

東鑑曰文治二年丙午三月十日 庚寅左典殿の管息首服を如

船橋驛 天道念佛踊之圖



天道念佛

船橋宮の内の東光寺及漁師町の不動院夏見の

薬王寺等の境内に於て執りせり毎歳二月十六日より始り同十八日

終る昔ハ一七日の間執り堂前土を以壇を築き竹を以柱を礎

これを梵天と稱し其四方は四の門を開き四十八柄の神幣を建注連

を引まゝ皆悉く諸の佛天を表し内ハ大日如来の像を安し

不ろと一旨味の飲食を供養せり詰衆の道俗ハ各一昼夜

間六度つ垢離して浄衣を着し白布を以て造る所の宝冠を頂

き三寶諸等の沙号を稱へて敬礼し六根懺悔の文を唱ふ又其間

中々弥陀の称号を唱へ金太鼓を打鳴し梵天の四方を右繞せ

り教回昼夜は間断なく相傳ふ往古弘法大師出羽國湯殿

山を始り踏分ちひ頃同國山形の東南天道村といふ地に於て

これを開闢し興基とてこゝに五穀成就の爲の行あり

と云なくハセり

速

船橋の沖はあり俗釜淵と号く土人の謔云昔平

将門の愛妾桔梗前将門とひく後ハ流石は都へ歸らむも物

なり船橋の里小暫しやまらひ終ハ此海底小身と云く

此海の漁幸あり其魚の諸魚と申膳料とて江戸へ運ぶ昔

大樹此地に至らせし頃今ハ海濱と申菜浦と名つくと又船橋太

神宮へも掛まらむとあり故ハ此辺の海濱と申菜浦と名つくと又船橋太

社説ハ此海は産物あり故ハ此辺の海濱と申菜浦と名つくと又船橋太

あり鯛の懸は伊波の形ありと云船橋宮神殿の伊波海波は懸し自然に魚を産

大峯山慈雲寺 同所二丁あり北の方新田あり五山派の禪窟

中々鎌倉建長寺第二世佛光禪師開基の精舎あり本寺

釋迦如来ハ行基大士の作取士ハ文殊普賢等なり昔ハ盛大の

寺院ありハ永祿年間里見義弘兵火は罹りて灰燼と爲

又此時當寺の鯨鐘をも國府臺の陣へ棄れり謬り利根

川へ沈りて今其處を字し鐘淵と云り國府臺の茶

室曆中徳巖とて禪僧

再ハ鐘を造ると云



船橋
意富日神社

意富日神社

成田海道との岐道五日市場村に宮居す世に船橋太神宮と稱せ延喜式内の淨神なりと關東一之宮と崇む神官大宮司

富氏奉祀せり

當社大宮司富氏の始祖は景行天皇第四の皇子五百城入彦尊あり天皇御孫として船橋より下向なされり後八千村の縣主惠當宮の神宮を司りしなり然るに仁平の頃荒木田滿國の舎弟基國を養子とす其後基國の時又嗣あきふ依りて千葉滿龍の子基龍を養子とす此時日月を以て家の紋とせし天正十九年辛卯大神君當社に奉祀の頃神官富氏御紋の軍配團扇の根引の若松を添て獻りし家紋の紋とす開年二月年始より旧例に任せ淨被大藤根引の若松を添て獻し奉りて登城せりと永規とす

本殿祭神

天照皇太神宮
豊受皇太神宮

二座相殿

左 八幡太神宮
右 春日大明神

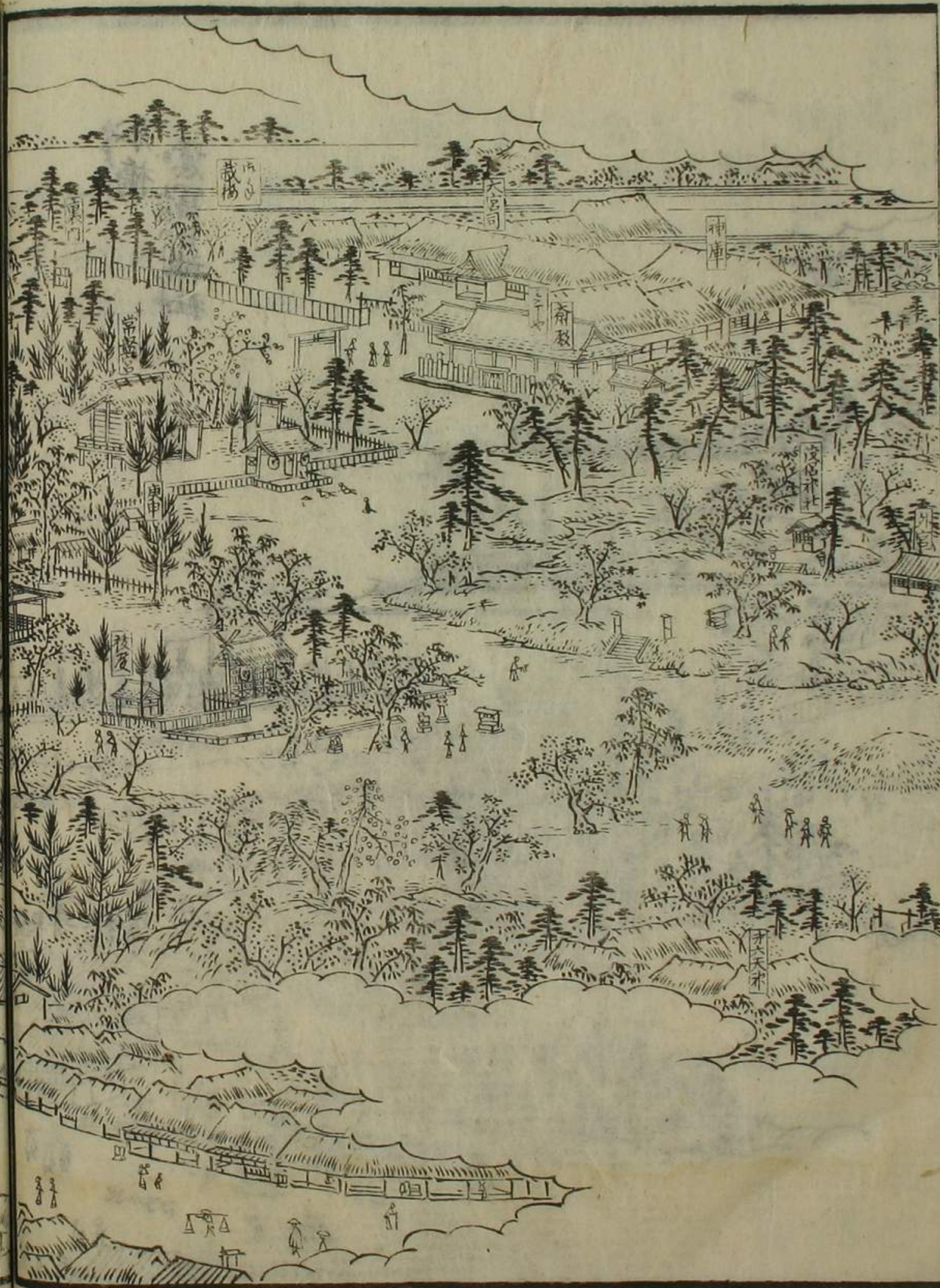
延喜式神名記曰 下總國葛飾郡二座

三 茂侶神社 貞觀五年五月二十六日 戊子 授下

又 同書曰 五位下 意富比年五月五日 己卯 授同神正五



二其



又同書曰 同十六年三月十四日癸酉授同神後

神寶 叢雲御劍 長一尺五寸あまりあり来由ありと云

神息劍 長一尺五寸あまりあり日蓮大士木劍 題も同大士の納らあり

近衛帝宣尔 仁平元年辛未六月十日船橋六郷の

千葉介満胤神領寄附状 兼久元年己卯四月十六日船橋六郷の地を寄

限海西限洗川并澄應北限石技路あり其餘應長應永永亨永祿文龜元龜

家集 建保六年十月素還法師行時 下後國より入り

常盤御宮 本殿の右神林此の麓にたてせあり四方は堀を繞らせり

東照大権現宮の神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

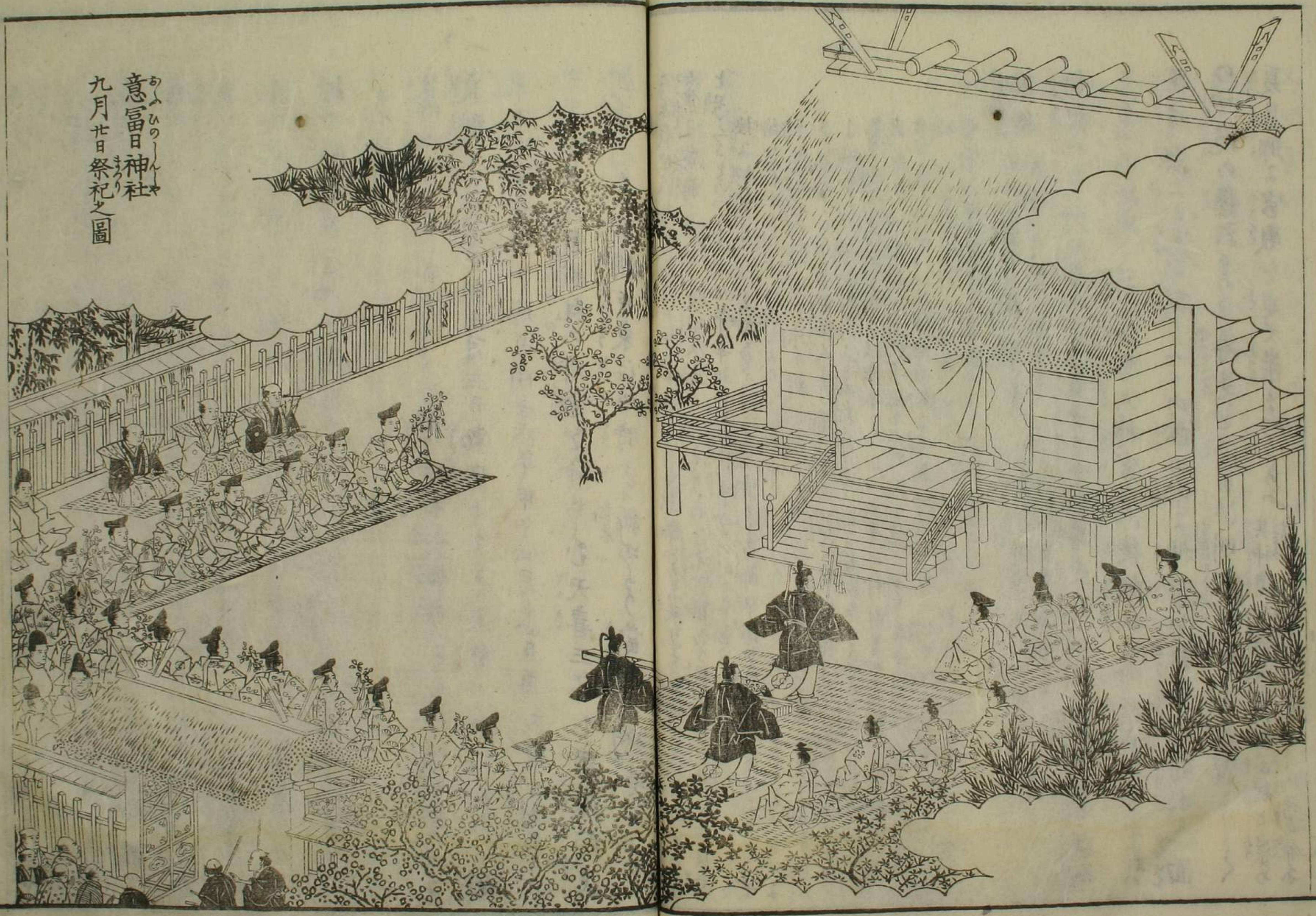
常盤御宮 東照大権現宮の神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

あふみの
意富日神社
九月廿日祭祀之圖



あつらひ海上の光りあつて、九日市場村に存せり同時凶徒調伏の禱矢を刺し、
其後裔海神あり、
と勢けく、
我を是伊勢國五鈴の川上より天降る神あり今より其神垣と
等しく崇へしと云云依尊其由を帝に奏し、
此神一時邑君に祈わらざるべし

朝日宮とあり、夫と對して當宮を夕日宮と稱し、
皇子五百城入彦尊とて、
村の縣主兼當宮の神官たり、
ついで後豐受皇太神宮を合祭し、
日の兩神を勸請ありて三社とせ、
貞觀十三年辛卯三月三日勅願ありて奉幣使下向ありて、
東一之宮の跡を賜り同十六年甲午四月十四日再勅使下向ありて、
天下泰平五穀成就の祈念を命せしむ天喜三年乙未源賴義
朝臣同義家朝臣東征の時寄願ありて當宮を修造ありて

同年六月六日遷宮なり、
辛未六月十一日勅ありて船橋六郷の地を沙寄附の院宣とあり、
義朝に命せしれ當宮沙再興ありて神宝を収らる、
村七姓村下飯山間村 御造宮の下司八十葉介常胤美濃前司清高
金曾木村夏見村等、
大澤平内兼家等なり、
時賴朝卿より幕下よ加へて青仰あれとも應せり、
神領を打とれ、
舎弟權及基継仙洞へ其由を歎奏上りて、
十六日實朝公へ詔を下し、
神領悉く寄附あり然天文以後東國争戦屢發、
神領も大方打とれ衰廢せんとせし、
依船橋郷の中より新小社領を寄し、
伊奈備前守忠次を奉行とて宮社沙造宮あり又此地に假



茂侶神社
黎明の大江の
内洋を望む圖

涉殿を建させし時として入涉ありく涉崇敬尤厚く
御武運長久の御祈禱を命せしむ
始ハ神官富氏の家を假の涉旅
館となしありし後涉殿を
建あつたり神官の家を同所田中との地へ移し
官宮の涉殿ハ神官富氏へ賜りしや再び元の社地へ
移り住らざる故今船橋
涉殿と唱へ宝曆十一年辛巳勅許ありく古往の例
に任せ毎歳
鳳閣は涉後をまゐりしなりぬ

當社の祭祀多き中あも正月十六日の涉神樂二月卯日の五
穀成就の神樂殊に九月廿日ハ大祭やと其式甚古雅なり
前の日ハ角力興行あり此形もハ天正十九年辛卯

東照大神君當宮へ御奉宮の時

上覧ありしとあり
其余の形も
ハこゝに淺せり

東の岡あり祭神ハ木花岡耶姫一座なり故に淺間山乃号
あり當社ハ延喜式内の御神ハ葛飾郡二座の中なり涉手
洗池あり今ハ民家の地ハ入或人云涉侶神ハ同郡小金領栗ヶ澤村ハ日本武尊ありと云

三代實録曰 元慶三年九月二十五日 壬子 授下

此社地ハ海濱に臨たる砂山中に松樹繁茂を西南の方
低く前ハ南総の驛路を見下し後ハ岡續ありく成田の街道
東北に繞る富嶽の白雪房総の翠巒筑波の紫霞も共此地の
眺望入りく風光最秀美なり例祭ハ六月一日に終り
隔年正月
始の時
柳宮ハ系ハ根ハの善松ハ當社の
地より擇とを旧例とせしなり

江戸名所圖會搖光下畢

編輯 松濤軒齊藤長秋



校正 男 藤原縣麻呂



全 縣麻呂男 月岑幸成



畫圖 長谷川法橋雲旦



剞劂 東都

佐脇伊三郎
朝倉伊八
宮田六左衛門

此は東都名所圖會を
加ら家老の三在平
經之とあると之は
其の跡を繼ぐ者志の
法之科の西美事
所為の付かきあり

ほふ共々整をいひおのこ
ち何れ世奉らるる所と帰
たしまいにめをいひおのこ
を連らふ家とて未の思ふ
以まれば何處幸成り果
はつむのこらば松免かた
自れ致造火の由に煙
西なるらり木をいひ
燈乃光きく馳ぬか為
をいひおのこをいひ
物も本接合と却
たはあやまりおのこは

筆加の事申す。此の如きは
等々。僅か。交遊中。此
の如きは。後。多。此
の如きは。今。此。此
の如きは。此。此。此
此。此。此。此。此。此
此。此。此。此。此。此

志。由。此。事。に。許。此
の。事。此。事。に。許。此
檢。船。来。此。官。商。

上田 憲憲



荃齋盛義書



拾遺

江戸名所圖會

全五冊

齊藤月岑編述

近刻

長谷川雪旦画圖

東都歳事記

全四冊

全

近刻

箱根

温泉名勝圖會

全三冊

藤原縣麻呂遺稿

長谷川雪旦画圖 近刻

熱海

同 雪堤補画

天保七丙申青陽

日本橋南一丁目

須原屋茂兵衛

東都書鋪

淺草茅町二丁目

須原屋伊 八

三都發
行書林

京都寺町通松原下

勝村治右衛門

大坂心齋橋筋唐物町

河内屋太助

同心齋橋筋安堂寺町

秋田屋太右衛門

江戸西國吉川町

山田佐助

同 神田鍛冶町三丁目

北島順四郎

同 淺草新寺町

和泉屋庄次郎

同 芝神明前

岡田屋嘉七

同 日本橋通三丁目

山城屋佐兵衛

同 横山町三丁目

和泉屋金右衛門

同 今川橋本銀町

永樂屋東四郎

同 日本橋通二丁目

小林新兵衛

同 神田通新石町

須原屋源助

同 日本橋通四丁目

須原屋佐助

